

ルシの人々は如何に死んだか¹⁾

— umřěti と přestavitise —

[上]

佐藤 昭 裕

目 次

[上]

1. 序—イオシフ・ヴォロコラムスキ修道院文書に現れる ドブリニャ伝説—	67
1.1. はじめに—ドブリニャは神の罰を受けたのか、 平穩に天に召されたのか—	67
1.2. 辞書の記述と各国語の訳を見る	73
1.2.1. 辞書の記述	73
1.2.2. 各国語の訳	75
2. 『過ぎし年月の物語』における umřěti と přestavitise —死因が推定可能な場合—	78
2.1. umřěti の使用	79
2.1.1. 死因を問わず使用されることについて	79
2.1.1.1. 病死の場合	79
2.1.1.2. 他者によって殺害された場合	81
2.1.1.3. 死因が不詳の場合	82
2.1.2. 身分、信仰を問わず使用されることについて	83
2.2. přestavitise の使用	84
2.2.1. 自然死の場合に使用されることについて	84
2.2.2. 当該人物の高貴な身分を積極的に主張しない	87
2.2.3. přestavitise について—観察のまとめ—	92
2.3. 死を表す他の表現 —sъkonьčatisę, съkonьčati životъ svoj, předati dušju svoju Bogu—	96
2.3.1. съkonьčatisę	96

* 本稿は2002年7月13日に京大会館で行われた京都大学言語学懇話会第59回例会における筆者の口頭発表「ルシの人々は如何に死んだか—umřěti, přestavitise, съkonьčatisę—」にもとづき大幅に加筆修正したものである。また本稿の1章と2章の議論は『古代ロシア研究』21（印刷中）に掲載の筆者の論文「古ロシア年代記における人の死を表す表現」を改訂したものである。スペースの関係で一つの論文を[上][下]に分けることになった。第3章以下は[下]として次号に掲載することとし、ここではその目次のみを示した。ここで言及される例・図表のうち75)以下、および注のうち74)以下は[下]に現れる。

1) ルシは、9世紀に興り、11～12世紀に最盛期を迎えた古ロシア国家の名称。当初キエフが中心であったが、13～14世紀以降モスクワにその力が移った。

2.3.1.1. 病死の場合	96
2.3.1.2. 病死以外の場合	97
2.3.2. sьkonьčati životь svoi, sьkonьčati žitьje svoje	98
2.3.3. předati dušju svoju Bogu 「自分の魂を神に委ねる」、 předati dušju v ruce boží 「魂を神の手に委ねる」	100
2.4. 戦争における公たちの死—尋常でない死に方は明示される—	102
2.4.1. 他動詞の使用	102
2.4.2. 自動詞の使用	105
2.5. 無名の人々の死	106
2.6. 悪人・異教徒の死の表現	108
2.6.1. 他動詞 ubiti、その他の具体的情景を描き出す動詞の使用	108
2.6.2. 異教徒・悪人たちの死を表す特別の表現	111
2.7. 直接話法中に現れる死の表現	114
2.7.1. 直接引用のなかで使用される自動詞 umřěti	114
2.7.1.1. 病死の場合	114
2.7.1.2. 殺害の場合	115
2.7.2. 直接引用のなかで使用される他動詞 ubiti	116
2.7.3. 直接引用の中で使用される přestaviti se	118
2.8. これまでの議論のまとめ	119

[下]

3. 年代記テキストの生成と přestaviti se の使用
 - 3.1. 「死亡報告」と「事件の叙述」
 - 3.1.1. přestaviti se の現れる文脈
 - 3.1.2. umřěti の現れる文脈
 - 3.2. 「先行要約」と「後行叙述」
 - 3.3. 『過ぎし年月の物語』における「死亡報告」と「事件の叙述」の分布
 - 3.3.1. 「死亡報告」における ubiti の使用
 - 3.3.2. 「死亡報告」における umřěti の使用
4. 『ノヴゴロド第1年代記（古輯）』における「死亡報告」と「事件の叙述」
 - 4.1. 「死亡報告」と「事件の叙述」の分布
 - 4.1.1. 動詞ごとの分布
 - 4.1.2. 「先行要約」と「後行叙述」
 - 4.2. 『ノヴゴロド第1年代記』で死亡記事の対象となる人々
 - 4.2.1. 市長官たちの死
 - 4.2.1.1. přestaviti se を用いた定式化された死亡報告
 - 4.2.1.2. ubiti の使用
 - 4.2.1.3. umřěti の使用
 - 4.2.2. 教会指導者たちの死
 - 4.2.2.1. přestaviti se の使用による「死亡報告」
 - 4.2.2.2. umřěti の使用
 - 4.2.3. 一般市民たちの死
 - 4.2.3.1. ubiti の使用
 - 4.2.3.2. その他の表現の使用
 - 4.2.4. 出家して死んだ市民たち
 - 4.3. ubiti を用いた「死亡報告」スタイルの記述
 - 4.4. 『過ぎし年月の物語』と『ノヴゴロド第1年代記（古輯）』の並行する記事
5. 結語

1. 序

—イオシフ・ヴォロコラムスキ修道院文書に現れるドブリニャ伝説—

1.1. はじめに

—ドブリニャは神の罰を受けたのか、平穩に天に召されたのか—

2001年3月、来日したロシア科学アカデミー・ロシア文学研究所（プーシキンの家）古代ロシア文学部門のA. G. Bobrov博士により、Volokolamskij sbornik, すなわち1536年に編纂されたイオシフ・ヴォロコラムスキ修道院(Iosifo-Volokolamskij monastyr')文書²⁾についての講演があった³⁾。この講演で博士は、同文書中に収録されている1520年代に成立したとされるノヴゴロドとアトス山に関する物語(skazanie)集を“Novgorodsko-afonskij sbornik”「ノヴゴロド・アトス文選」と呼び⁴⁾、その重要性について語った。この文選の中にはノヴゴロドに題材をとる6つの物語が含まれている⁵⁾。

そのうちの一つ、“Povest' o varjažskoj božnice (o posadnike Dobrynje)”「ヴァリヤギの教会の物語（市長官ドブリニャについて）」には、ノヴゴロドの市長官⁶⁾ドブリニャが当時交易のためノヴゴロドを訪れていたネムツィ、すなわち西欧の商人から賄賂を取ってCerkov' Ioanna Predteči「授洗者イオアン教会」の場所にropata「正教以外の礼拝堂」を建てることを許した、その結果彼は神の罰を受け、ヴォルホフ川を船で渡ろうとして高波にさらわれ水死した、その遺体は辛うじて川から引き上げられた、と述べられている。次は、その一節である。

1) I kako že počcha posadnik Dobrynja s věča kъ svoej ulicy črez Volchovo vъ nasadě s

2) RGB. sobr. Iosifo-Volokolamskogo monastyrja, No.659

3) 同文書には主として16世紀の20年代から30年代にかけて書かれた物語等が収録されている。

4) これらは一つの丁(tetrad')をなしている。

5) 1) Povest' o varjažskoj božnice (o posadnike Dobryne)、2) Povest' o postroenii Blagoveščenskoj cerkvi、3) Povest' o Michailickom monastyre、4) Videnie ponomarja Aarona、5) Predskazanie archiepiskopu Ione、6) Čudo Varlaama Chutynskogo o dvuch osuždennyhの6つからなりノヴゴロド・サイクルと呼ばれる。

6) 市長官(posadnik)は、当初は公によって任命された代官であったが、ノヴゴロドでは12世紀初頭以降民会(věče)で選出され、共和国全体の首長としての役割を果たすようになった。

ljudmi svoimi, i vnezapu priide vichrъ i, vzeмъ nasad, vъznese na vysotu jako bole
dву saženej i udari o vodu. I tu potope posadnikъ Dobrynja къ dnu, a pročich vsěch
pereimaša v sudech v malychъ perevozniki. I tako nevody, mrežami i uži edva
vъzmogoša vyvlešči tělo ego iz řeki. (PLDR 1982: 190)

ドブリニャが民会から自分の家のある通りに帰るため家来たちといっしょに小
舟でヴォルホフを渡っている時、突然突風が吹き付け、船を捉えて2サージェン⁷⁾
よりも更に高く持ち上げ、ついで水面に打ちつけた。そして市長官ドブリニャ
は水底に沈んだが、他の人々は皆渡し守たちが小舟に助け上げた。そして漁網や
網、投網を使って、辛うじて彼の遺体を川から引き揚げた。

ところが中世ノヴゴロドで成立した歴史記録『ノヴゴロド第1年代記』を見ると、
6625(1117)年⁸⁾の記事に次のようにある^{9), 10)}。

7) 約4.27メートル。

8) ルシでは、ビザンツ式の「世界開闢紀元」を用いて旧約聖書創世記にある天地創造からはじ
めて年代を数えていた。その計算によれば、西暦紀元元年は世界の始まりから数えて5509年
目、つまり紀元5509年ということになる。また1年の始まりも現在とは異なっていて、ビザ
ンツでは9月1日に新年が始まり（現在の暦法で言えば翌年の）10月末に1年が終わる「9月
暦」(sentjabr'skij god)が、ルシではこれを少し変え、同じ年号の年が、ビザンツより半年遅れ
て3月1日に始まり2月末に終わる「3月暦」(martovskij god)が使用されていた。従って、
ここにある6625年は西暦に直すと1117年3月から1118年2月末までということになる。なお
ロシアでも、その後15世紀末に9月暦が採用され、ピョートル大帝の改革まで使用された。
さらに、この3月暦、9月暦とならんで、ルシではいま一つ、西暦紀元元年を5510年とする
「超3月暦」(ul'tramartovskij god)も使用されることがあった。これによれば、ビザンツの9
月暦より半年早く、従って通常の3月暦に対してはちょうど1年早く同一年号の年が始まるこ
とになる。年代記作者が様々な記録・資料を集めて年代記を編纂、集成する際に、時として、
通常の3月暦による記録と超3月暦による記録が混在し、結果として年号についての記述が混
乱することもあった。本稿でも例126)に出てくるオリクサの殺害については、このことが問
題になる。注133)を参照。

9) 『過ぎし年月の物語』からの引用はカールスキー校訂の *Lavrent'evskaja letopis'*, vyp.1:
Povest' vremennyh let, Polnoe sobranie russkich letopisej, t.1. izd.2. 1926.によった。その際校
訂者によって他の写本から補われ角括弧 [] 内に示された部分はそのまま [] を用いて表示し
た。titloによる省略部分は丸括弧 () を用いて筆者が補った。行の上に書かれた小文字表記は
通常の表記と区別しなかった。アルファベットを用いた数字はアラビア数字で置き換えた。ま
た全体をローマ字転写したが、その際次のように若干の簡略化を行った: ω→o, ε→je, oy→u,
θ→f, ĭ→i, i→i. 人名については校訂テキストで小文字になっているものもすべて大文字に直し

- 2) Vъ se že lěto přestavisja (aor.3sg.< přestavitisę) Dobrynja, posadnikъ novgorodъskyi, dekanrja vъ 6. (NPL: 20-32)

この年ノヴゴロドの市長官ドブリニャが亡くなった。12月6日のことである。

この年の記事に現れるドブリニャ関係の記述はこれがすべてである。従って、彼の死についてもこれ以上の情報は記されていない。

このpřestavitisęという動詞は現代ではすでに使われなくなっているが¹¹⁾、19世紀ロシアを代表するダーリの『詳解ロシア語辞典』を見ると、次のような意味が記されている。

- 3) perejti otъ vremennoj žizni kъ věčnosti 「(地上の) かりそめの生から永遠の生へと

た。『ノヴゴロド第1年代記(古輯)』からの引用はナソーノフ校訂の *Novgorodskaja pervaja letopis' staršego i mladšego izvodov*. 1950. によった。カールスキー版、ナソーノフ版ともに、直接引用された登場人物の言葉、会話部分を特に明示することはしていないが、ここでは引用符“ ”を補ってこれを明示した。引用部分の途中でスペースなどの理由で省略を行った場合には、[...]という記号を用いてこのことを示した。しかし、それぞれの年の記事を途中から引用したり、あるいは最後まで示さなかった場合には、そのことは特に示さなかった。引用箇所は『過ぎし年月の物語』についてはカールスキー校訂版のコラム番号と行で、『ノヴゴロド第1年代記(古輯)』についてはナソーノフ校訂版のページ番号と行で示した。動詞を中心として、それぞれの例で議論の中心となる箇所はゴシック体で、また参考として重要な箇所は下に波線を引いて示した。それぞれの日本語訳は原則として、筆者もその訳注作業に参加した日本古代ロシア研究会による訳、すなわち國本哲男他1987『ロシア原初年代記』ならびに青木正博他1978「ノヴゴロド第一年代記古輯(シノド本)訳・注」、同1980「ノヴゴロド第一年代記古輯(シノド本)訳」Ⅱ～同1991「ノヴゴロド第一年代記古輯(シノド本)訳」Ⅶに拠ったが、一部必要に応じて筆者が改変した。その際『過ぎし年月の物語』については、重要な変更箇所は下に二点鎖線を引いたり、注でそのことを明記した。『ノヴゴロド第1年代記(古輯)』については、長期に及ぶ訳注作成作業の結果としての不統一などもあり、それぞれの修正箇所を明示するとあまりにも煩雑になるため、いちいち示すことはしなかった。

- 10) 以下本稿では次のような略語を用いる。3pl.: 3人称複数、3sg.: 3人称単数、aor.: aorist, DAbs.: Dativus absolutus, impf.: imperfect, l-Prt.: l-participle, Past.Prt.Act.: Past Participle Active, Past.Prt.Pass.: Past Participle Passive, pf.: perfect, pr.: present.

- 11) アカデミー版ロシア語辞典第2版には *prestavit'sja* は *ustar.* 「廃語」とされ、*skonščat'sja* 「逝く、逝去する」、*umeret'* 「死ぬ」と言った意味が当てられている。cf. *Slovar' russkogo jazyka*. 1983. t.3: 385.

移る」, skončat'sja 「逝去する」, otojti, pereselit'sja vь večnost', vь lono Avraama 「永遠 (の生)・アブラハムの懷に去る・入る」, odat' Bogu dušu 「神に魂を引き渡す」, upokoit'sja 「永眠する」, ispustit' duchъ, dušu 「息を引き取る」; pokončit'sja 「(俗語) 終わる、死ぬ」, etc. (cf. Dal' 1880-1882, t.3: 396)

すなわち、この語は19世紀当時、宗教的・キリスト教的な表現として「神の御許に行く」というニュアンスで使用されていたらしいことが分かる。

一方で、我が国での従来の解釈を見ると、古ロシア年代記『過ぎし年月の物語』(Povest' vremennykh let)の戦前の除村訳ではこの語のアオリスト3人称単数prěstaviseをただ「死んだ」と訳しているが¹²⁾、日本古代ロシア研究会によるその邦訳¹³⁾や『ノヴゴロド第1年代記』の邦訳¹⁴⁾ではこの語を「亡くなった」あるいは「みまかった」と訳して来た。その根底には、この語を敬語と捉え、貴人の死を表すという理解があったと考えられる。

同時に筆者は、これまで古ロシア語のテキストを読んで来て、この語には単に「敬語」的な意味や「神の御許に行く」という意味だけでなく、(キリスト教徒として)「平穏な死をとげる」という含意があるように感じていた。そのような考慮もあって、現在日本古代ロシア研究会による邦訳の作業が進行中のラブレンチー年代記(Lavrent'evskaja letopist')の後半、いわゆる『Suzdal'年代記』訳注の、最初に公刊された筆者担当の部分では、このprěstavitseという語の訳語として「世を去った」という表現を用いてある¹⁵⁾。

そして、もし筆者のこの考えが正しければ、この『ノヴゴロド第1年代記』記事に見る限り、ヴォロコラムスキ修道院文書中の「ヴァリャグの教会の物語 (市長官ドブリニャについて)」における伝承とは異なり、市長官ドブリニャは平穏な、キリスト教徒にふさわしい死をとげたことになる。

12) 除村吉太郎訳1943.『ロシア年代記』を参照。

13) 國本哲男他1987.『ロシア原初年代記』を参照。

14) 青木正博他1978.「ノヴゴロド第一年代記古輯(シノド本)訳・注」,同1980.「ノヴゴロド第一年代記古輯(シノド本)訳」Ⅱ～同1991.「ノヴゴロド第一年代記古輯(シノド本)訳」Ⅵを参照。

15) 有宗昌子他2000.「スズダリ年代記訳注」を参照。

ちなみに、『ノヴゴロド第1年代記』中でも、尋常でない死に方をした人々、例えば実際にヴォルホフ川で溺死した人々について、6739(1231)年のノヴゴロドの大火に関連して *i golovъ nёkoliko istopё vъ Volchovё* 「そして数人の人がヴォルホフ（川）で溺れ死んだ」と書かれていたり、6824(1316)年の市民の内紛に関連して *i svergoša i s mosta vъ Volchovъ* 「そして人々は彼をヴォルホフに投げ込んだ」という記事がある。

- 4) *Vъ lёto 6739. Zagorёsja ot Matёeva dvora ot Vyškovicja, i pogorё vъsъ konъsъ Slavъnъskyi oli do koncja Chъlma, mimo svjatogo Piju; nъ ubljude bogъ svjatychъ cerkvъ; nъ tolmi bjaše ljutъ požarъ, jako po vodё ognъ gorjaše, chodja črёsъ Vълchovo, vъsёmъ ljudъmъ zrjaščimъ, i golovъ nёkoliko istopё (aor.3sg.< istopnuti) vъ Volchovё. (NPL: 71-18)*

6739(1231)年 ヴイシカの子マテイの邸から火が出て、スラヴノ区全体が聖イリヤ教会のそばのホルムの端まで燃えた。しかし神は聖なる教会を護られた。火事は烈しく火が水面を伝って燃えるほどであり、(火は)すべての人々が見ている間にヴォルホフ川を越えた。そして数人がヴォルホフ（川）で溺れ死んだ。

- 5) *V lёto 6824. [...] Togo že lёta , ešče ne došedšju knjazju Michailu do goroda, jaša Ignata Bёska, i biša i na vёči, i svergoša (aor.3pl.< sъvrёšči) i s mosta vъ Volchovъ: tvorjachutъ bo ego perevёtъ deržavša k Michailu; a bogъ to vёstъ. (NPL: 95-25)*

6824 (1316) 年 [...] 同じ年、ミハイル公(K452)がまだ町に到着する前に、(人々は) イグナチイ・ベスクを捕らえて、民会で彼を打ち、橋からヴォルホフ川に投げ込んだ。彼がミハイル(K452)¹⁶⁾に密告していたからである。しかしこれは神のみが知る場所である。

16) 日本語の訳文中で人名の後に括弧書きで現れる数字のみあるいはアルファベットと数字の組み合わせからなる番号は、日本古代ロシア研究会で用いているリューリク王朝に属する公たちの個人背番号である。彼らの系統を知ることがそのまま本稿の議論に必要というわけではないが、この番号がついている人物はすべてリューリク王朝に属する公たちの一人であるという意味で、個々の人物の身分・素性を表すのに便利であるのでここでもそれぞれにこの番号を振っておくことにする。cf. 國本哲男他(1987: 564-575)、「リューリク王朝系図: Rodoslovnaja rjurikovičej」(1981)。

そこで、この2つの情報の齟齬とも見えるものについて訊ねると、Bobrov博士は、1) ヴォロコラムスキ修道院文書の内容はあくまでも伝説であって必ずしも事実に基づいている必要はない、2) ノヴゴロドには幾人もの市長官ドブリニャがいて、修道院文書に現れる市長官ドブリニャと『ノヴゴロド第1年代記』6625(1117)年の記事に見える市長官ドブリニャは異なる人物であったのかもしれないとし、齟齬があっても構わないという見解を示した¹⁷⁾。

一方で、この時Bobrov博士は、*prěstavitisę*が平穏な死を表すという筆者の見解に対し特に異を称えることはなかったが、この筆者の考えが単なる思いこみにすぎず、この動詞の使用に当たり、当該人物の死が「平穏な死であった」という含意は存在しないという可能性も勿論否定できない。

そこで本稿では、12世紀はじめにキエフで成立したロシア最古の年代記『過ぎし年月の物語』と14世紀半ばにノヴゴロドで成立し1352年までの記事を含む『ノヴゴロド第1年代記(古輯)』¹⁸⁾をもういちど読み直し、そもそも中世ロシアの年代記において人々の死がどのように書き表されているかを確認したい。そして「死」を表す様々な動詞表現、とくに *umьrěti*「死ぬ」、*prěstavitisę*「死ぬ、物故する」、*sъkonьčatisę*「逝く、逝去する」¹⁹⁾等の用法について整理、記述する。さらに、これらの動詞の使用が

17) 『過ぎし年月の物語』の6478(970)年の記事にも、後にキエフ大公になったヴラジミル・スヴァトスラヴィチ(在位980~1015)の母方の伯父(あるいは叔父)としてドブリニャという名前の人物が出てくる。この時ヴラジミルはこのドブリニャを伴い公としてノヴゴロドに赴いた。さらに6488(980)年の記事では、彼が兄ヤロポルク(04)を倒してキエフ大公になるとともに、このドブリニャをノヴゴロドに置いてノヴゴロドを治めさせたという記述がある。このようにドブリニャという名前が特に珍しい名前でないのなら、このドブリニャと問題の市長官ドブリニャ以外、他にもドブリニャという名のノヴゴロド市長官がいた可能性を否定することはできない。なお『過ぎし年月の物語』の6604(1096)年の項には、当時ノヴゴロドの公だったムスチスラフ(D11)が、ノヴゴロドを攻めようとするオレグ(C4)を迎え撃つために先遣隊としてラグイルの子ドブリニャを送るという記事があるが：*Мѣстиславъ же сдѣлавъ с Новѣгородѣи. и послаша Добрыню Рагуиловича. передъ собою въ сторуѣжъ.*(PVL: 238-7)「ムスチスラフはノヴゴロドの人々と相談し、(人々は)ラグイルの子ドブリニャを先遣隊として自分の前に送った」、このドブリニャは年齢から言っても、6625(1117)年に死んだ後の市長官ドブリニャその人である可能性が強い。

18) ただし現在残っている写本では1016年までの記事は欠落している。

19) ここで「」内に付けた訳語は、和久利誓一他編(1992)の岩波『ロシア語辞典』にみられる、

年代記テキストの構造、成立と関係していることを論じる。そして、これらの議論を通して、市長官ドブリニャの死を含むルシの市民たち、公たちの死についての年代記テキストの記述を正確に理解するための基盤を示したい。

1.2. 辞書の記述と各国語の訳を見る

本論に入る前に、いくつかの中世語辞典の記述と『過ぎし年月の物語』の各国語訳に見られる訳語を見ておきたい。

1.2.1. 辞書の記述

本稿で問題となる語彙のうち、とくに *umřěti*, *přestavitise* という 2 つの動詞について、さらに第 3 の表現としての *sъkonьčatisę* について、『スレズネフスキー』、現在刊行中の『11 世紀～17 世紀ロシア語辞典』という 2 つの古ロシア語辞典、および『チェコ科学アカデミー版古教会スラブ語辞典』に記載されている意味・訳語を確認しておく²⁰⁾。

6) *umřěti*²¹⁾

- a. スレズネフスキー：1) *umeret'* 「死ぬ」、2) *pogibnut'* 「(事故、災害などで) 死ぬ、非業の死をとげる」 (cf. Sreznevskij, t.3: 1222)
- b. チェコ科学アカデミー版古教会スラブ語辞書：1) *umřít* 「死ぬ」、*zesnout* 「(主の許で) 眠りに就く」、*zahynout* 「非業の死をとげる」；*umeret'* 「死ぬ」、*skončat'sja* 「逝く、逝去する」、*pogibnut'* 「(事故、災害などで) 死ぬ、非業の死をとげる」；*sterben*, *entschlafen*, *untergehen* (cf. SJS, t.4, 648)

7) *přestavitise*

- a. スレズネフスキー：1) *perejti* 「移る」、*izmenit'sja* 「変わる」、2) *prekratit'sja*

それぞれの語の現代語の形式に対する日本語の訳語である。それらの中世ロシア語における正確な意味、ニュアンス、用法を明らかにすることが本稿の議論の目的のひとつである。

20) 以下はそれぞれの辞書からの正確な引用ではなく、そこに示された主要な訳語を適宜引いたものである。その際、本来はなかった 1), 2), ...a), b) などの項目番号も付加した。

21) 11 世紀～17 世紀ロシア語辞典はまだ刊行途中で *umřěti* についての記述はない。

「止む、終わる」, 3) *udalit'sja* 「離れる」, *prěstavitišę otъ světa sego: umeret'* 「死ぬ」; 4) *umeret'* 「死ぬ」 (cf. Sreznevskij, t.2: 1694)

b. 11世紀～17世紀ロシア語辞典: 1) *perejti v zagrobnoe carstvo* 「死後の世界に移る」, *umeret'* 「死ぬ」, 2) *izmenit'sja* 「変わる」, *peremenit'sja* 「変わる」, 3) *uderžat'sja* 「抑える」, *otkazat'sja ot čego-l.* 「断る」, 4) *prekratit'sja* 「止む、終わる」 (cf. SRJ XI-XVII, t.19: 53)

c. チェコ科学アカデミー版古教会スラブ語辞書: *zemřiti* 「死ぬ」; *umeret'* 「死ぬ」, *prestavit'sja* 「死ぬ、物故する」; *sterben, verscheiden*²²⁾ (cf. SJS, t.3: 484)

8) *sъkonъčatišę*

a. スレズネフスキー: 1) *okončit'sja* 「終わる」, *prijti k koncu* 「終わりに至る」, 2) *skončat'sja* 「逝く、逝去する」, *umeret'* 「死ぬ」, 3) *ispolnit'sja* 「実現する」, *sbyt'sja*, 4) *soveršit'sja* 「完成する」, 5) *byt' istreblennym* 「根絶やしになる」, 6) *past'* 「落ちる」, *obrušit'sja* 「崩壊する」(比喩的な意味で), 6) *dostignut'* 「到達する」, 7) (*sъkonъčati* の代わりとして) *okončit'* 「終える」 (cf. Sreznevskij, t.3: 719)

b. 11世紀～17世紀ロシア語辞典: 1) *zakončit'sja* 「終わる」, *zaveršit'sja* 「終わる」, *prijti k koncu* 「終わりに至る」, 2) *soveršit'sja* 「完成する」, 3) *sbyt'sja* (*sbyvat'sja*) 「実現する」, *ispolnit'sja* (*ispolnjat'sja*) 「成就する」, (*o predskazanii, proročestve i t.p.*), 4) *pogibnut'* 「事故・災害などで亡びる」, *prekratit' sušestvovanie* 「存在をやめる」, 5) *umeret'* 「死ぬ」, *skončat'sja* 「逝く、逝去する」, 6) (名詞として) *umeršij* 「死者」, 7) (比喩的に) *past'* 「倒れる」, *obrušit'sja* 「不意に降りかかる」(*o gneve, jarosti i t.p.*) (cf. SRJ XI-XVII, t.24: 229-230)

c. チェコ科学アカデミー版古教会スラブ語辞典: 1) *skončit (se)* 「終わる」,

22) この辞書では再帰動詞は独立した項目としてでなく他動詞の中に記されている。ここで挙げた *prěstavitišę* の意味は他動詞 *prěstaviti* の意味のうちの 1) a. *přeněsti, přestaviti; perenesti, perestavit', übertragen, umstellen;* の項の中に記されている。

uplynout「経過する」, přestat「止む」; končit'sja「終わる」, okončit'sja「終わる」, projti「通り過ぎる」; enden, ablaufen, verfließen, vorübergehen; b. [比喩的] skonat「死ぬ」, dokonat「終える」, zemřít「死ぬ」, zahynout「非業の死をとげる」; skončat'sja「死ぬ、物故する」, умерet'「死ぬ」, pogibnut'「(事故、災害などで)死ぬ、非業の死をとげる」; verscheiden, sterben, untergehen; 2) [特殊] být umučen「拷問を受ける」; prinjat' mučeničeskiju smert'「殉教の死をとげる」; den Martertod erleiden (cf. SJS, t.4: 273-275)²³⁾ :

1.2.2. 各国語の訳

『過ぎし年月の物語』の各国語訳を見ると、問題の動詞には次のような訳が当てられている。

9) 各国語訳にみる umřěti, přestaviti se, skončati se の訳語

	umřěti	přestaviti se	skončati se
ロシア語訳	umeret'	prestavitisja	umeret'
ドイツ語訳	sterben	verscheiden	verscheiden
ポーランド語訳	umrzeć	zmarł < zemrzeć	zmarł < zemrzeć
英訳	to die	to die	to die
邦訳	死ぬ	亡くなる	生涯を終える

リハチョフによるロシア語訳²⁴⁾は、必ずしもきちんとした現代ロシア語になっているわけではない。動詞や名詞の形態は現代語のパラダイムに従って直してあるが、語

23) 他動詞の2つの項に分かれて記載されている。それぞれの他動詞としての本来の意味は次の通りである。1) ukončit, skončit, dokončit; okončit', zakončit', končit'; beenden, abschliessen, vollenden; etc. 2) a. skoncovat (s někym, něčim), zničit, zahubit; pokončit' (s kem-n., čem-n.), uničtožit', pogubit', istrebit'; ein Ende machen, vernichten, vertilgen; etc. ... (SJS, t.3: 273-275)

24) cf. Lichačev 1996.

彙やシンタックスについては多くの場合古ロシア語のテキストに現れる語彙、統語構造をそのまま使っており、必ずしも常に古ロシア語のニュアンスの違いが現代語のニュアンスの違いに移し変えられているわけではない。

ミュラーのドイツ語訳²⁵⁾では *umbrěti* に対して *sterben*、*prěstavitisę* と *sъkonъčatisę* に対しては *verscheiden* という訳し分けが行われている。この *verscheiden* という訳語は雅語、莊重体とされており、宗教的な文脈でよく使用されるようでもある²⁶⁾。

シェリツキのポーランド語訳²⁷⁾でも *umrzeć* と *zmarł* (< *zembrzeć*)²⁸⁾ という2つの語彙が使い分けられている。そのニュアンスの違いは必ずしもはっきりしないが、後者は公式の文脈で使用されるようである²⁹⁾。

クロスによる英訳³⁰⁾ではすべて *to die* が使用され特別な訳し分けはされていない。

日本古代ロシア研究会訳の『過ぎし年月の物語』³¹⁾では「死ぬ」、「亡くなる」、「生涯を終える」という訳し分けがなされている。以下にそれぞれの例を挙げる。

10) *prěstavitisę*: 6508(1000)年の記事より

V lět(o) 6508. Prestavisę (aor.3sg.) Maľfrěď. v se že lěto prestavisę (aor.3sg.) i

25) cf. Müller 1999.

26) 国松孝二他編『独和大事典』小学館1985では「【雅】死ぬ、亡くなる、この世を去る、みまかる」、ズーデン (Das grosse Wörterbuch der deutschen Sprache in acht Bänden. 2., völlig neu bearbeitete und stark erweiterte Auflage. 1993-1995. Mannheim: Dudenverlag) では、“[mhd. 「中高ドイツ語」 *verscheiden*=*weggehen*, *verschwinden*; *sterben*] (geh. 「莊重体」: *sterben*”、グリム (Deutsches Wörterbuch von Jacob und Wilhelm Grimm) では “*scheiden*, *weggehen*, *scheidend vergehen*, *sterben*, mhd. 「中高ドイツ語」 *verscheiden*, ahd 「古高ドイツ語」. *farskeidan* (*verscheiden*)” とある。]

27) cf. Sielicki 1968.

28) *zmarł* は *zembrzeć* の過去男性単数3人称形。不定詞 *zembrzeć* は現代ポーランド語では使用されない。

29) シモン・グジェラック氏 (京都大学大学院文学研究科博士課程) によれば *zmarł* は公的なニュアンスがあり、死亡広告、新聞記事ではこの動詞が使用される、一方 *umrzeć* の方はそのようなニュアンスを持たないという。個人的、私的な場面ではどちらの語も使用され得る。例えば、*Umarł mi ojciec*, *Zmarł mi ojciec* のどちらも「父に死なれた」の意味で使用可能。なお墓石で没年を表示する時は *zmarł* を *zm.* と略して用いる。

30) cf. Cross 1953.

31) cf. 國本哲男他1987.

Rogněď mati Jaroslavlę. (PVL: 129-15)

- a. 露訳： V god 6508. Prestavilas' Malfrida. V to že leto prestavilas' i Rogneda, mat' Jaroslava. (Lichačev 1996: 195)
- b. 独訳： Im Jahre 6508. Es verschied Malfrid'. In demselben Jahr verschied auch Rogned', die Mutter Jaroslávs. (Müller 2001: 158)
- c. ポーランド語訳： Roku 6508 [1000]. Zmarła Malfreda. Tegoż roku zmarła Rogneda, matka Jarosławowa. (Sielicki 1968: 302)
- d. 英訳： 6506-6508 (998-1000). Malfrid died. In this year died also Rogned, Yaroslav's mother. (Cross 1953: 124)
- e. 邦訳： 6508 (1000) 年 マルフレダが亡くなった。この同じ年にヤロスラフの母ログネデも亡くなった」(國本哲男他1987: 143)

11) umřěti: 6477 (969) 年の記事より

po trech dn(e)chъ umre (aor.3sg.) Ol'ga. i plakasę po nei s(y)nъ jeja i vnuci jeja. i ljudьje vsi plačemъ velikomъ. (PVL: 68-2)

- a. 露訳： Čerez tri dnja Ol'ga umerla, i plakali po nej plačem velikim syn ee, i vnuki ee, i vse ljudi, (Lichačev 1996: 169)
- b. 独訳： Nach drei Tagen starb Ól'ga, und es weinten um sie ihr Sohn und ihre Enkel und alles Volk mit grosser Klage. (Müller 2001: 83)
- c. ポーランド語訳： Po trzech dniach umarła Olga i płakał po niej syn jej, i wnuki jej, i ludzie wszyscy płaczem wielkim. (Sielicki 1968: 259)
- d. 英訳： Three days later Olga died. Her son wept for her with great mourning, as did likewise her grandsons and all the people. (Cross 1953: 86)
- e. 邦訳： オリガ (02W) は3日後に死に、彼女の息子、彼女の孫たちおよびすべての家臣は、彼女を偲んで激しく泣いた (國本哲男他 1987: 78)

12) sьkonьčatię: 6523 (1015) 年の記事より

samъ bo boleše velmi. v neiže bolesti i skončasę (aor.3sg.). m(ě)s(ja)ca. iulę. vъ 15

d(e)нь. (PVL: 130-18)

- a. 露訳: A sam sil'no razbolejsja; v etoj bolezni i umer ijulja v pjatnadcatyj den'.
(Lichačev 1996: 195)
- b. 独訳: er selbst war sehr krank, in welcher Krankheit er auch verschied, im Monat Juli, am 15. Tage. (Müller 2001: 160)
- c. ポーランド語訳: sam bowiem chorował bardzo i w tej chorobie zmarł miesiąca lipca 15 dnia. (Sielicki 1968: 303)
- d. 英訳: for he himself was very sick, and of this illness he died on July 15. (Cross 1953: 124)
- e. 邦訳: 自分が重病だったからである。彼はその病によって7月15日に生涯を終えた。(國本哲男他1987: 145)

2. 『過ぎし年月の物語』における umbrěti と přestavitise

—死因が推定可能な場合—

これらの語彙がテキストの中で実際にどのように使われているかを明らかにするために、主として文脈を伴って使用されている場合、すなわちある程度の長さの記述の中で個々の人物の死の様子が具体的に述べられ死因が明確にされる場合、あるいは明示的に述べられてはいないが年齢や地位、職階などの状況証拠からある程度まで死因が合理的に推定可能な場合について見ていきたい。

『過ぎし年月の物語』と『ノヴゴロド第1年代記』³²⁾を比べてみると、個々の記事がより詳細に書かれ死のプロセスや原因が具体的に述べられているのは前者の場合に多い。そこで本章では、まず前者によって2つの動詞の使用について、この議論の出发点となった1) 当該人物が平穏な死をとげたかどうか、2) 当該人物に対する敬意が示されているかどうか、という点を観察したい。

32) 以下では特に指定しない限り『ノヴゴロド第1年代記』と書いて『ノヴゴロド第1年代記(古輯)』を指すこととする。

2.1. umbrěti の使用

2.1.1. 死因を問わず使用されることについて

2.1.1.1. 病死の場合

最初の例はリューリク王朝の始祖リューリクの死の場面である。死因は明記されていないが後継者について遺言を残す機会があったということから病死と判断できる。

13) 6387(879)年 リューリク(01)の死

Vъ lět(o) 6387. Umeršju (DAbs.Past.Prt.Act.< umbrěti) Rjurikovi predastъ kne[že]nъje svoje Olgovi. ot rada³³⁾ imъ sušča. vьdavъ jemu s(y)nъ svoi na rucě. Igorę. bystъ bo dětesкъ velъmi. (PVL: 22-18)

6387(879)年 リューリク(01)が死に臨んで自分の公位をオレグに委ねた。(オレグは)彼にとって一族の者だったから、彼の手に分の息子イゴリ(02)を任せたのである。(イゴリが)極めて幼かったからである。

次はリューリクの息子イゴリの妻でルシの公の一族の中で最初にキリスト教の洗礼を受けたオリガの死の様子である。息子スヴァトスラフ(03)に対する彼女の言葉からも語り手の説明からも、彼女が重い病気だったことが分かる。

14) 6477(969)年 イゴリ(02)の妻オリガの死

reč(e) jemu Volga “vidiši mę bolnoje suščju. kamo choščeši ot mene iti.” bě (impf.3sg.< byti) bo razbolělase (I-Prt.< razbolětise) uže. reč(e) že jemu “pogrebъ mę. idi že jamože chočeši.” po trech dn(e)chъ umre (aor.3sg.< umbrěti) Olga. i plakase po nei s(y)nъ jeja i vnuci jeja. i ljudъje vsi plačemъ velikomъ. [i] nesoša i pogreboša i na městě. (PVL: 67-27)

オリガ(02W)は彼に「私が病気であるのをお前は知っているでしょう。お前は私から(離れて)どこへ行こうとするのですか」と言った。(オリガは)すでに重い病にかかっていたのである。そこで(オリガは)彼に「私を埋葬してから好き

33) Lichačev 1996 の読みrodaに従いたい。

なところへ行きなさい」と言った。オリガ(02W)は3日後に死に、彼女の息子、彼女の孫たちおよびすべての家臣は、彼女を偲んで激しく泣いた。(人々は)彼女を運び、平地に埋葬した。

次の例も死因は明示されていない。しかし当該人物がルシの教会の最高指導者である府主教という立場にあり、かつ彼が死んだという事実以外にも、いくつかの付加的な情報が記されている以上、もし尋常でない死に方をしているとすれば、そのことも当然記録に留められてしかるべきであると判断できる。

15) 6597(1089)年 府主教イオアンネス2世の死

V se lěto ide Janъka [v Greky d(o)šči] Vsevoloža. nareč(e)naja pr(ě)že. [i] privede Janka mitropolita. Ioana skorpčinu jehože [viděvše] ljudьje vsi rekoša. “se namъ prišelъ.” ot goda bo do goda prebyvъ umre (aor.3sg.< umьrěti). bě že se mužъ [ne] kniženъ. no umomъ prostъ. i prosto rešči. (PVL:208-14)

この年フセヴォロド(D)の〔娘で〕前に述べたヤンカが〔グレキに〕行った。ヤンカは去勢した府主教イオアンネス(2世)を連れて来た。皆は彼を〔見て、〕「ほら、死人がやって来た」と言った。彼は1年いて死んだ。この人は学問は〔なかった〕けれども、知恵が素朴で言葉使いも素朴であった。

病死ではあるが、不慮の事故に起因する病死もある。次のオレグは蛇に噛まれたことが原因で死ぬことになる。

16) 6420(912)年 オレグの死・蛇にかまれた傷が元で死ぬ。

i vyniknuvši zmia zo lba. [il ukljunu v nogu i s tog(o) razbolēs(ja) (aor.3sg.< razbolětise) i umre (aor.3sg.< umьrěti). (PVL: 39-9)

頭蓋骨から蛇が出て来て彼(オレグ)の足を噛み、それがもとで彼は病気になって死んだ。

2.1.1.2. 他者によって殺害された場合

umbrětiは他の人々によって殺害された場合にも使用される。次はトムトロカニ³⁴⁾でグレキ³⁵⁾の将軍に毒殺されたロスチスラフの死である。彼の死が毒殺であったことは先行する文脈から分かる。

17) 6574(1066)年 ロスチスラフ(A1)の死

bě že Rostislavъ mužъ doblъ ratenъ. vzrastomъ že lěpъ i krasenъ licemъ. i m(i)l(o)st(i)въ ubogymъ. i umre (aor.3sg.< umbrěti). m(ě)s(ę)ca. Fevrale. v 3 d(e)nъ. I tamo položenъ bys(tъ) въ c(e)rkvi s(vja)tyja B(ogorodi)ca. (PVL: 166-16)

ロスチスラフ(A1)は勇敢で戦闘的であり、体格は良く、顔が美しく、貧しい者には恵み深い人物だった。そして彼は2月3日に死に、その地の聖母教会に葬られた。

このように他者によって殺された場合にumbrětiが使用される例は、実はそれ程多くない。それは後述のように、例えば戦闘で死んだ場合には唯「死んだ」と表現されるのではなく、具体的な傷の負い方が示されたり、他動詞ubiti「殺す」を用いてubiša(aor.3pl.)「人々が(彼を)殺した」、bystъ ubъjenъ(aor.3sg.< byti “be” + Past.Prt.Pass.< ubiti)「(彼は)殺された」(受け身)というような表現で当該人物が死んだことが示されることの方が多いからである。

勿論例外もある。次の例は、具体的な戦闘行為の描写に際してudarenъ(Past.Prt.Pass.< udariti) bystъ(aor.3sg.< byti “be”) podъ pazuchu strěloju「彼は脇を矢で射られた」というように他動詞を用いて傷の負い方が示されるが、死んだ事実の確認のためにはubiti「殺す」でなくumbrětiが使用されるという珍しい例である。これは傷を負った時点と実際に息を引き取った時点の間に時間があいていたからであるとも考えられる。しかし通常は他動詞ubitiの使用によって死の記述が完成する。

34) クリミア半島の東側の対岸、タマン半島にあったルシの植民都市。

35) ギリシアのこと。ここではビザンツを指す。

18) 6605(1097)年 ムスチスラフ(B31)の死

Mstislavu že chotěšču strělitī. vnezapu udarenъ (Past.Prt.Pass.< udariti) bys(tъ) (aor.3sg. < byti) podъ pazuchu strěloju. na zaborolěchъ skvozě d(o)sku skvažneju. i svedoša i i na tu noščъ umre (aor.3sg.< umřěti). i taiša i 3 dni. i vъ 4-i d(e)nъ povědaša na věči. (PVL: 272-1)

ムスチスラフ(B31)が矢を射ようとしていたとき、不意に胸の下に矢が当たった。彼が城壁の上(にいたとき)板の割れ目から(飛んで来た矢に当たったのである)。そこで(人々は)彼を運び去ったが、その夜彼は死んだ。(人々は)彼(の死)を3日間隠し、4日目に民会に報告した。

2.1.1.3. 死因が不詳の場合

勿論、必ずしも常に死因が推定可能なわけではなく、次の例のようにはっきりしない場合もある。

19) 6370(862)年 リューリクの兄弟シネウスの死

po dvou že lětu. Sineusъ umre (aor.3sg.< umřěti). a bratъ jeho Truvorъ. i prija vlastъ Rjurikъ. i razdaja mužemъ svoimъ grady. (PVL: 20-11)

2年後にシネウスが死に、彼の弟トルヴォルもまた(死んだ)ので、リュリク(01)が権力を取った。そして自分の家臣に町々を、分け与えた。

20) 6496(988)年 ヴィシェスラフ(09)の死

umeršju (DAbs.Past.Prt.Act.< umřěti) že starěišemu. Vyšeslavu Nověgorodě. posadiša Jaroslava Nověgorodě. a Borisa Rostově. a Glěba Muromě. S(vja)toslava Derevěchъ. Vsevoloda Volodimeri. Mъsti(sla)va Tmutorokani. (PVL: 121-12)

最年長のヴィシェスラフ(09)がノヴゴロドで死ぬと、(人々は)ヤロスラフ(13)をノヴゴロドに、ボリス(14)をロストフに、グレブ(15)をムロムに、スヴァトスラフ(11)をドレヴリャネ(の国)に、フセヴォロド(10)をヴラヂミリに、ムスチスラフ(18)をトムトロカニに据えた。

2.1.2. 身分、信仰を問わず使用されることについて

umьrěti は使用の対象について特に制限はない。公³⁶⁾の一族の死について、とりわけキリスト教国家ルシの母とも言えるイゴリの妻オリガのような信仰篤い人物や、府主教といった高位の聖職者についても umьrěti が使用されることは、上の 2.1.1. に示した例から分かる。

ここでは、逆に異民族・異教徒の死について使用されている例を挙げる。ただし、いずれの場合も死因については本文中に言及されていない³⁷⁾。

21) 6538(1030)年 リャヒすなわちポーランドの国王ボレスワフの死

v se že vremę umre (aor.3sg.< umьrěti) Boleslavъ. Velikyi v Lęsěchъ. i bys(тъ) mętežъ v zemli Lędъskę. (PVL: 149-28)

この頃リャヒの ボレスワフ大王³⁸⁾ (1 世) が死に、リャヒの国に反乱が起った。

22) 6590(1082)年 ポロフツィ³⁹⁾の公オセニの死

Vъ lět(o) 6590. Osenъ. umre (aor.3sg.< umьrěti) Polovečъskyi knęzъ. (PVL: 205-1)

6590(1082)年 ポロフツィの公オセニが死んだ。

以上、2.1.に見た例の観察を通して umьrěti について次のことが確認された。すなわち umьrěti は死を表す無色透明、中立的な表現であることが分かる。

36) 公(knjaz')とはリューリク王朝の始祖であるリューリクの子孫たちを指す。それ以外ルシには bojarin と呼ばれるそれぞれの土地の貴族がいた。

37) この動詞はまた、次の例のように動物が死んだ場合にも使用可能である。次は、6420(912)年の記事にあるオレグの飼っていた馬の死について、直接話法の中で使用されている例である。reč(e) "koje jes(тъ) konъ my. jęgože bę postavil kormiti i bljusti jęg(o)." on že reč(e) "umerlъ (l-Prt.< umьrěti) jes(тъ) (pres.3sg.< byti)." (PVL: 38-28) 『私の馬はどこにいるか。飼育し世話するように命じておいたが』と言った。彼は『死んでしまいました』と言った。

38) 日本古代ロシア研究会の訳では「リャヒの偉大なボレスワフ(1世)」となっているが、このように直した。cf. 國本哲男他(1987: 170)

39) 南ロシアの草原地帯に住んでいたトルコ系遊牧民族。11世紀から13世紀初めにかけてさかんにルシを攻めた。

- 23) a. 原因を問わずあらゆる死について使用される。すなわち、自然死、他者による殺害といった死因に依らず使用される⁴⁰⁾。
- b. 誰の死についても使用される。すなわち、ルシの公たちや信仰篤き人々、異民族、異教徒を問わず、同じように使用される。

2.2. přestavitiseの使用

2.2.1. 自然死の場合に使用されることについて

přestavitiseの使用に際して、多くの場合死因は明確にされない。しかし文脈、他の箇所からの情報、当該人物の年齢や職階などから死因を推定できる場合をも加え、見てみたい。

次の例の場合は、後続の前置詞句 *ot řezanĭja želve* 「腫物の切除によって」によって死因が明らかになる。

24) 6584(1076)年 スヴァトスラフ(C)の死

sego že lĕta prestavise (aor.3sg.< přestavitise) S(vja)toslavъ s(y)nъ Jaroslavъ. m(ě)s(ja)ca. dekabre. 27 ot řezanĭja želve. i položenъ Černigově u s(vja)tago Sp(a)sa. i sĕde po nemъ Vsevolodъ na stolĕ. m(ě)s(ja)ca genvarĕ. (PVL: 199-8)

この年12月27日にヤロスラフの子スヴァトスラフ(C)が腫物を切って亡くなった。彼はチェルニゴフの聖救世主教会に⁴¹⁾ 葬られ、フセヴォロド(D)が彼の後に座についた。1月1日のことであった。

次は、6582(1074)年のキエフ・ペチェルスキー修道院の物語の中の一節である。引用箇所では院長フェオドシーの死が述べられているが、ここでは彼の死を報ずることそのものが目的ではなく、長老マトフェイの事跡を語るに当たり、時間関係を明らかにする。

40) 他者による殺害の場合に他動詞的表現がより多く使用されるのは、必要な情報を与えるという語用論的理由によるものである。

41) 日本古代ロシア研究会の訳では「チェルニゴフの聖救世主教会のそばに」となっているが、このように直した。cf. 國本哲男他 (1987: 220)

にするために彼の死が参照されている。フェオドシーが年を取って病死したことはここでは示されていないが、他の箇所の記述から確認することができる⁴²⁾。

25) 6582(1074)年 ペチェルスキー修道院長フェオドシーの死

pri sem bo starci Feodosii prestavišę (aor.3sg.< přestavitisę). i bys(тъ) Stefanъ igumenъ. i po Stefaně Nikonъ. (PVL: 191-12)

この長老のもとでフェオドシーが亡くなり、ステファンが、ステファンの後にはニコンが、修道院長になった。

次の幾つかの例では、当該人物の死因は示されていない。しかし彼らが府主教や主教という教会における高い地位・立場にあり、同時に死の知らせに加えて他の付加的な情報が示されているにも拘わらず、特別な死の状況が一切ほのめかされていないことから判断して、恐らくは自然な死、病死あるいは老衰による死であったろうと推定される。

26) 6597(1089)年 府主教イオアンネス1世の死

V se že lět(o). prestavišę (aor.3sg.< přestavitisę) Ioanъ mitropolitъ. bys(тъ) že Ioan mužъ chytrъ knigamъ. I učenъju. m(i)l(o)st(i)въ ubogymъ. i vdovicemъ. laskovъ že ko vsękomu b(r)atu i ubogu. směrenъ že i krotokъ. molčalivъ. řečistъ že knigami s(vja)tymi. utěšaja pečalnyja. (PVL: 208-7)

この年に府主教のイオアンネス（1世）が亡くなった。イオアンネス（1世）は聖書と学問にすぐれた人物であり、貧しい人や寡婦に対して慈悲深く、またすべての金持ちや貧しい人に対してはやさしく、また恭順であり、柔和で無口であったが、嘆く者を聖書によって慰めるときには雄弁であった。

42) 例41) についての議論を参照。彼が息を引き取る瞬間については、後述するように、同じ6582(1074)年の記事の中で Predastъ (aor.3sg. < předati) d(u)šju v rucě Božii 「魂を神の手に委ねた」という表現を用いて述べられている。

27) 6602 (1094) 年 ヴラヂミリの主教ステファンの死。

V se ž(e) lět(o) prestavišę (aor.3sg.< přestavitisę) jep(i)s(ko)pъ Volodimerskyi Stefan. m(ě)s(ja)ca aprilę. vъ. 27 d(e)nъ. vъ čas 6 nošči. Byvъ preže igumenъ Pečerskomu manastyrju. (PVL: 226-23)

この年4月27日の夜の6刻にヴラヂミリの主教ステファンが亡くなった。彼は以前ペチェルスキー修道院の院長であった。

次のグループでは、*přestavitisę*は、当該人物の死について多かれ少なかれ詳細な物語を始めるに先だって、書き出しの部分で、前もってその人物が死んだことを告げる際に使用されている。病死であることはこの部分だけでは分からないが、いずれも後続のより詳細な物語の中で確認できる⁴³⁾。

28) 6562(1054)年 ヤロスラフ(13)の死

Vъ lět(o) 6562. Prestavišę (aor.3sg.< přestavitisę) velikyi knęzъ Rusъskyi Jaroslavъ. i ješče bo živuščju jemu. narędi s(y)ny svoja rekъ imъ. (PVL: 161-1)

6562(1054)年 ルシの大公ヤロスラフ(13)が亡くなった。彼がまだ生きている間に彼は自分の息子たちに教えて、

29) 6582(1074)年 ペチェルスキー修道院長フェオドシーの死

V lět(o) 6582. Feodosii igumenъ Pečerskyi přestavišę(aor.3sg.< přstavitisę). skazemъ že o uspeni jeho malo. (PVL: 183-20)

6582(1074)年 ペチェルスキー修道院長フェオドシーが亡くなった。我々は少し彼の臨終について物語ろう。

30) 6601(1093)年 キエフ大公フセヴォロド(D)

V lět(o) 6601. indikta 1 lęto. Prestavišę (aor.3sg.< přestavitisę) velikyi knęzъ

43) *přestavitisę*のこのような使用については、「先行要約」と名付けた上で3.2節で詳細に述べる。

Vsevolodъ. s(y)нъ. Jaroslavъ. vnukъ Volodimerъ. m(ě)s(ja)ca. aprilę. vъ 13 d(e)нъ. a pogrebenъ bys(tъ) 14 d(e)нъ. Neděli sušči togda str(a)stnĕi. i dni suščju četvertku. v onъ že položenъ bys(tъ) vъ grobĕ. v velicĕi c(e)rkvi. s(vja)tyja Sofĭja. (PVL: 215-27)
6601(1093)年 インディクトの第1年⁴⁴⁾。ヴラヂミルの孫、ヤロスラフの子フセヴォロド大公(D)が4月13日に亡くなり、14日に埋葬された。その時は受難週であり、彼が聖ソフィア大教会の柩に安置されたのは木曜日であった。

2.2.2. 当該人物の高貴な身分を積極的に主張しない

この語が、前節の例からも分かる通り、公の一族や、府主教、主教といった高位の聖職者について多く使用されているところから見ると、死んだ人物の身分が高貴であることを積極的に主張する敬意表現であるように思えるかもしれない。しかし同時に、以下に示すように修道僧イサーキーの死、また信仰深きヤン夫婦の妻（そしておそらくは夫）の死についてもこの語が使用されていることから見ると、ヤン夫婦がキエフの市民社会の中で尊敬される富裕な市民であり夫のヤンが土地の貴族(bojarin)であった可能性、さらには注46)で述べるように、彼がヤロスラフ(13)の軍司令官(voevoda)を務めたヴィシャタの子であり、キエフの千人長であった可能性もあるものの、この動詞の使用は死んだ人の血統の高貴さや財力を表すというよりも、むしろキリスト教的な観点から見て尊敬される人々の死を表すと理解できる。

次は、6582(1074)年の記事にあるペチェルスキー修道院の事跡中に見える修道士イサーキーの物語の一節である。イサーキーはその信仰によって尊敬され、このように修道院の事跡中にその名が留められたわけであるが、あくまでも一介の修行僧、修道僧であった。ここで引用したのは、洞窟の中での激しい修行の末悪魔にたぶらかされて意識を失い、呼びかけても返事をしないイサーキーについて、彼の世話をしに現れ

44) インディクトとは紀元312年にコンスタンティノス1世が始めた15年を1周期とする徴税のための年数計算の単位である。ビザンチンの9月暦に従い、西暦紀元312年の9月1日から(西暦で言う)翌年の8月末までが最初のインディクトの第1年ということになる。そこから計算して、3月暦の6600(1092)年9月1日から翌6601(1093)年8月末までが、この6600(1092)年9月から始まった当該インディクトの第1年になり、6601(1093)年4月13日の彼の死もインディクトの第1年の出来事ということになる。

た修道院長アントニーが発した言葉である。なおこれは、*prěstavitisę*が直接話法の中で用いられている数少ない例であり⁴⁵⁾、実際の死の場面に際してその場に居合わせた人物の口から発せられた言葉として興味深い。

31) 6582(1074)年 修道僧イサーキーが死んだと勘違いしたアントニーの言葉

i reč(e) Antonii “se uže prestavilšę (l-Prt.< prestavitisę) jestb (pr.3sg.< byti).” i posla v manastyř po Feodosъja i po bratju. (PVL: 193-10)

アントニーは「これはすでに亡くなってしまったのだ」と言って、フェオドシーと兄弟僧を呼びに（使いを）修道院に送った。

次は信仰深いキエフの市民ヤン夫妻の死の記事である。戦争で死んだ場合を除き、一般市民の死が名前を挙げて年代記に記録されることは『過ぎし年月の物語』では特に稀であるが、まずヤンの妻マリアの死が、6599(1091)年のペチェルスキー修道院院長フェオドシーの改葬の記事の中で、彼の予言が的中したエピソードとして記される。

32) 6599(1091)年 ヤンの妻マリアの死

v se bo lęto prestavisę (aor.3sg.< prěstavitisę) Janevaja. imeneny M(a)ryja. m(ę)s(ja)ca. avgus(ta). 16 d(e)ny. I prišedše černorizъci. pęvše obyčnyja pęsni. i prinesše ju položiša ju v c(e)rkvi. s(vja)tyja B(ogorodi)cę. protivu grobu Feodosъjevu. na šjujei stranę. Feodosii bo položenъ bys(tъ). vъ 14 a sii vъ 16. (PVL: 212-18)

この年マリヤという名のヤンの妻が8月16日に亡くなり、修道僧たちがやって来て、定められた歌をうたい、彼女を運んで来て聖母教会の中のフェオドシーの柩の向かい、すなわち左側に彼女を安置したのです。フェオドシーは14日に、この人は16日に安置されたのでした。

さらに、6614(1106)年の記事に現れる Janъ starecъ dobryi「善良なる老ヤン」の死に

45)『過ぎし年月の物語』ではこれが唯一の例である。

についてもこの語が使用されている。このヤンはペチェルスキー修道院の（教会の）拝廊(pritvorъ)に葬られたとある。この「ペチェルスキー修道院の教会」とは、この例32)でマリヤが葬られたとされる「(ペチェルスキー修道院の) 聖母教会」のことであろう。もし彼がマリヤの夫であるなら、妻と同じ場所に葬られたとということになる。この記事では彼の篤信の人柄について多く述べられている。90歳というその年齢が示されている以上、死因は老衰と考えてよいだろう⁴⁶⁾。

46) この「善良なる老ヤン」という人物は、あるいはキエフの名門の貴族の出身であった可能性もある。すなわち祖父はノヴゴロドの軍司令官オストロミール (cf. イパーチー年代記 6572 (1064) 年。『オストロミール福音書』 (Ostromirovo evangelie 1056-57) の注文主として知られるノヴゴロドの市長官オストロミールと同一人物であったと考えられる)、父はヤロスラフ賢公 (13) の軍司令官であったヴィシャタ (cf. 6551 (1043) 年, 6579 (1071) 年) という家系の出身であった可能性がある。ただし、このことについては次のような問題があり、簡単に結論は出ない。

この6614(1106)年の項では、この「善良なる老ヤンの死」の記事の直前、この年の記事の冒頭にポロフツィとの戦いの記事があり、カールスキー校訂のラヴレンチー年代記では“V lët(o) 6614. Vojevaša Polovci okolo Zarěčьska. i posla po nich S(vja)topolkъ. Janę. i Ivanka Zachariča Kozarina. i ugoniša Polovcě. i polonъ oteša.” (PVL: 281-4) 「6614(1106)年 ポロフツィがザレチスクのそばで戦ったので、スヴァトポルク (B3) は彼らを追跡するためにヤン、そしてハザール人、ザハリイの子イヴァンコを送った」(二点鎖線を引いた部分は次に示すリハチョフの注、シェリツキの訳、ミュラーの訳にある考えを入れ古代ロシア研究会による邦訳(下に引用)を直した)とある。リハチョフは本文テキストを“... i posla po nich Svjatopolkъ Janja i Ivanka Zachariča, Kozarina; i ugoniša Polovcě, i polonъ oteša.” (Lichačev 1996: 119) と改訂した上で、注で1430年代に成立したノヴゴロド・ソフィア集成 (Novgorodsko-sofijski svod) 系の年代記ではI posla po nichъ Svjatopolkъ Janja Vyšatiča i brata Putjatu, Ivanka Zachariča i Kozarina 「そしてスヴァトポルクは彼らを追跡するためにヴィシャタの子ヤンとその兄弟プチャタ、ザハリイの子イヴァンコ、そしてコザーリンを送った」(Sofijskaja pervaja letopis' i drg.) となっていると指摘している (cf. Lichačev 1996: 539)。ただし、彼の現代ロシア語訳には、このノヴゴロド・ソフィア集成系のテキストは特に反映されてはいない (cf. Lichačev 1996: 257)。同時にリハチョフはここで問題となっている「善良なる老ヤン」の死の記事についても注を付け、『過ぎし年月の物語』では、ヴィシャタが自ら結びついていた、あるいは先祖たちを通して結びついていたノヴゴロドの町に関する物語、またルシの歴史においてその一族の者たちが参加した出来事については、おそらくは、このヴィシャタの子ヤンと、父ヴィシャタを典拠としている… (cf. Lichačev 1996: 539) とし、あたかも老ヤンがヴィシャタの子ヤンであると認めているかのようである。その根拠となっているのは、この老ヴィシャタの死の記事の中にある「私も彼から多くの物語を聞き、彼から聞いたことをこの年代記に書き記した」(本稿例文33) 参照) という「年代記作者自身」の言葉であろう。ただし年代記作者はこの老ヤンがヴィシャタの子であるとは一言も言っていない。そして、このこともリハチョフの現代語訳には反映されていない (cf. Lichačev 1996: 257)。もしこのスヴァトポルクの命によってポロフツィを追跡

し、ノヴゴロド・ソフィア集成系の年代記でヴィシャタの子とされているヤンと、リハチョフがその注で年代記作者の言葉をもとにしつつも、なかばアプリアリにヴィシャタの子とした老ヤンが、どちらもヴィシャタの子であり、従って同一人物であるとする、この年90歳になるヤンが死の直前にポロフツィとの戦いに従軍し、それなりの活躍をしたということになってしまう。この点についてリハチョフがどう考えているのかははっきりしない。クロスは、ポロフツィとの戦いに従軍した方のヤンをヴィシャタの子とし、この部分に“6614 (1106) The Polovcians raided in the vicinity of Zarechesk, and Svyatopolk sent *Yan son of Vjshata*, his brother Putyata, and Ivan the Khazar, son of Zakhariy, to pursue them. They drove off the Polovcians and took some spoil. In the same year, *Yan, that righteous ancient*, died at a fair old age after a life of ninety years.” (Cross 1953: 203, イタリックは本稿筆者による) という訳をつけている。彼はこのようにした根拠を特に示していないが、リハチョフの注にあった『ソフィア第1年代記』、あるいは後述のミュラーの注にある『イパーチー年代記』の行上、欄外の書き込み等に従ったものと思われる。同時に彼は、6579(1071)年の記事に現れるペロオゼロで2人の呪術師を退治した「ヴィシャタの子ヤン」について、これを「年代記作者が1106年に死んだとする老ヤンと混同してはならない」(Cross 1953: 267 注225)としている。一方シェリツキは、これとは逆に、前者のヤンについてはとくにヴィシャタとの親子関係を示さず、後者の老ヤンについて括弧つきで、Jan [Wyszata]「ヤン (ヴィシャタ)」としている: “Roku 6614 [1106]. Wojowali Połowcy około Zarieczka, i posłał za nimi Świętopełk *Jana* i Iwanka Zacharjicza, Chazarzyna, i dogнали Połowców, i zdobycz odebrali. Tegoż roku *zmarł Jan [Wyszata], starzec dobry, przeżywszy lat dziewięćdziesiąt, w starości sędziwej.*” (cf. Sielicki 1968: 410, イタリックは本稿筆者による)。このJan [Wyszata] (JanもWyszataもともに主格) という書き方でSielickiが正確に何を意味しようとしていたのか、「ヴィシャタの子ヤン」という意味なのか、「ヤンすなわちヴィシャタ」という意味なのかははっきりしないが、いずれにせよこの年に死んだ老ヤンとヴィシャタを関係づけたことになる。古代ロシア研究会による邦訳では「6614(1106)年 ポロフツィがザレチスクのそばで戦ったので、スヴァトボルク(B3)は彼らを追跡するためにヴィシャタの子ヤン、彼の兄弟プチャタ、ザハリーの子イヴァンコおよびコザリンを送った。彼らはポロフツィを追い払い、捕虜を奪い返した。この年に善良な長老ヤンが亡くなった。彼は90年生きて、敬うべき老年にあった。」(國本哲男他1987: 303-304)としている。これはポロフツィを追跡したヤンについてはクロスと同じ立場である。一方この年に死んだ老ヤンについては「修道院の長老」と捉えているようである。さらに、最も新しい訳であるミュラーも、クロスと同じ考えに立ち、ポロフツィと戦ったヤンをヴィシャタの子とし、90歳で死んだ老ヤンについては特に何も言わない: “Im Jahre 6614. Die Kumanen überzogen mit Krieg [das Gebiet] um Zareč'sk. Und Svjatopólk sandte ihnen nach den *Jan <Vyšátič>* und seinen Bruder Putjáta> und Ivánko Zachár'ič, den Chazaren. Und sie holten die Kumanen ein und nahmen ihnen die Beute ab. In demselben Jahr verschied *Jan, ein guter Greis*, nachdem er 90 Jahre gelebt hatte, in gesegnetem Alter;” (Müller 2001: 308, イタリックは本稿筆者による)。以上、この年の記事でポロフツィとの戦闘に参加したヤンと、この年に90歳で死んだ善良なるヤンのいずれかがヴィシャタの子であることは確実であると思われるが、諸家の意見を参考にしても、そのいずれがヴィシャタの子であるかは、決めがたい。

なおこの他、上のCrossの見解に関して触れたように、『過ぎし年月の物語』では6579(1071)年の項に「ヴィシャタの子ヤン」が2人の占師を退治するという記事がある。また6597(1089)

33) 6614(1106)年 善良なる老ヤンの90歳での死

v se že lět(o) prestavise (aor.3sg.< přestavitise) Janъ starecъ dobryi živъ lět 90 v starosti mastitě živъ po zakonu b(ož)lju. ne chužii bě pervych pravednich. ot negože i azъ mnoga slovesa slyšach. ježe i vписach v lětopisanъi semъ. ot negože slyšach. bě

年の項には、ペチェルスキー修道院の聖母教会の奉献に関連して、“[V] lět(o) 6597. [S](vja)šč(e)na bys(ъ) c(e)rkvi Pečer]ьskaja s(vja)tyja B(ogorodi)ca. manastyre Feodosъjeva. [...] pri bl(a)gorodnēmъ knęzi. Vsevolodě. deržavnomu Rusъskyja zemlā. i čadoma jeho Volodimera. i Rostislava. voevodstvo deržaščju Kyjevъskyja tysęšča Janevi. igumenstvo deržaščju Ioanu.” (PVL: 207-25) 「6597(1089)年 フェオドシーのペチェルスキー修道院の聖母教会が浄められた。[...] 尊いフセヴォロド公(D)と彼の2人の息子ヴラヂミル(D1)とロスチスラフ(D2)がルシの国を治め、ヤンがキエフの千人長の職にあり、イオアンが修道院長職にあったときのことである」という記述がある。この千人長ヤンは、6579(1071)年に妖術師を退治したヴィシヤタの子ヤンの後の姿であり、また6614(1106)年にポロフツィと戦ったヤンの壮年の姿であろう。一方で、この記事はこの千人長ヤンと修道院の結びつきの強さを示すものであるとも思え、その場合には千人長ヤンと1106年に90歳で死んだ善良なる長老ヤンが同一の人物であって欲しいとも思えてくる。ただ、もしそうであるとすればこの奉献の時、彼は73歳だったことになり、現役の千人長ではなかったろう。さらに、6601(1093)年の記事にも、ポロフツィとのストウグナ川での戦いの記述においてヤンが出てくるが、これは年齢から考えて1106年の記事でも同じようにポロフツィと戦ったもう一人のヤンであると考えられる。

なおここでの議論には直接関係しないが、上で引用したこの6614(1106)年の項の冒頭のポロフツィとの戦いの記事 “i posla po nich S(vja)topolkъ. Janę. i Ivanka Zacharъča Kozarina. i ugoniša Polovcě. i polonъ otęša.” (PVL: 281-5) 「スヴァトポルク(B3)は彼らを追跡するためにヤン、そしてハザール人、ザハリイの子イヴァンコを送った」に現れるKozarinaという語(この語はラヂヴィル写本とアカデミー写本には現れない)の解釈についても問題がある。リハチョフは上で示した通り Ivanka Zacharъča と Kozarina の間にカールスキー校訂版にはないコンマを補いこの Kozarin という語をザハリイの子イヴァンコと同格で現れる普通名詞 kozarin 「ハザール人」として訳す。筆者の訳もこのリハチョフの解釈に倣ったものである。一方で、このリハチョフ校訂のテキストと現代語訳を収めた Lichačev (1996) の人名索引には、かつてのカールスキー校訂版の人名索引にあると同様 (cf. PVL: 549)、“Kozarin, kievskij voevoda 「コザリン、キエフの軍司令官」 119, 257, 539” (cf. Lichačev 1996: 557) とあってこの語はあたかも固有名詞とされているようである。上で示した古代ロシア研究会による訳も、コザリンを固有名詞としてとり、「ザハリイの子イヴァンコおよびコザリンを送った」となっている。シェリツキ、ミュラーはリハチョフの訳文と同じように、この語を普通名詞の「ハザール人」として訳している (cf. Sielicki (1968: 410), Müller (2001: 308))。ただしミュラーは、den Chazaren の部分に注をつけ、イパーチー年代記にある i Kozarina という形が本来の形であるとすれば、この語が固有名詞として解釈される可能性があると指摘し、上記リハチェフの人名索引を参照している。

bo mužъ bl(a)gъ. i krotokъ i směrenъ. ogrěbajasę vsękoja vešči. jehože i grobъ
jes(tъ) v Pečerskom monastyri v pritvorě ideže ležiti tělo jeho položeno.
m(ě)s(ja)ca. iunę vъ 24. (PVL: 281-7)

この年に善良な老ヤン⁴⁷⁾が亡くなった。彼は90年生きて、敬うべき老年にあった。彼は神の掟に従って生き、昔の正しい人々に劣ることはなかった。私も彼から多くの物語を聞き、彼から聞いたことをこの年代記に書き記した。彼は敬虔で、柔和で、恭順な人であり、あらゆる俗事を避けていた。彼の柩はペチェルスキー修道院（の教会）の拝廊にあり、そこに彼の遺体が納められている。安置されたのは6月24日であった。

修道士イサーキー、ヤン夫妻を除いて、普通の市民、あるいは無名の庶民の死について *prěstavitisę* の使用によって記録されている例が観察されないのは、そのような人々の平穏な死がそもそも年代記には記録されなかったからであると考えられる。一般市民、更には無名の庶民の死が記録されるのは、戦争や飢饉など、非常の場合、彼らが特別な死に方をした場合のみであり、その時には当然のことながら、その死に方も具体的に、動作を表す動詞を用いて記録されるのが常だからである。

一方で、この語が異民族や他の宗教の信仰者に対して使われることはない。もし異民族の指導者の死について自動詞を用いて表現される時は、上でみた *umŕěti* が使用される。

2.2.3. *prěstavitisę* について—観察のまとめ—

以上2.2.での観察は、次のようにまとめることができる。

34) a. *prěstavitisę* は病死あるいは老衰といった自然死の場合に使用される。

47) 日本古代ロシア研究会の訳では「善良なる長老ヤン」（國本哲男他1987: 304）となっていてペチェルスキー修道院の長老として解釈されたことを思わせるが、本稿の訳では659（1091）年に死んだマリヤの夫として世俗の人物であるという含みを持たせ「善良なる老ヤン」とした。しかし、彼がマリヤの夫ではなく、修道院の長老であった可能性もなお残る。

- b. *prěstavitisě*はキリスト教徒（正教徒）の死について使用される。この語に死んだ人への敬意が込められているとすれば、それはその人物の生前の身分、地位に対する敬意ではなく、その人が正教徒として死んでいったことに対する敬意であると考えられる。

動詞 *prěstavitisě* は接頭辞 *prě-* で始まるその語形から南スラブ系の語彙であることがわかる。東スラブ系の語彙では接頭辞 *pere-* を取る形がこれに対応する。従ってこの語はルシにキリスト教が導入されるとともに入ってきたと考えられる。34b) の特徴は、このことと適合している。

リヴォフは一方の *umřěti* については「*umřěti* に接頭辞をつけて形成された *umřěti* は、語根 *mьr/ mer* から派生された *morь, mьrtь, sьmьrtь* etc. と同じく、共通スラブ語 (*obščeslavjanskij*) 形式であり、スラブ祖語に由来する (*praslavjanskij*) 形式である」(L'vov 1975: 31) とし⁴⁸⁾、この *prěstavitisě* については「接頭辞 *pre-* のついた *prestavitisě*⁴⁹⁾ は明らかに文語形式 (*knižnoe slovo*) であるが、古ロシア語の文献の中でもっとも広く使用されている。古教会スラブ語文献においては、この語は主として動詞起源の名詞の形でアブラコスのカレンダーの中に現れる」(ibid.) とし、「ギリシア語の *ἡ μετάστασις, μετατίθημι* を *prěstavljenje, prěstavitisě* で、またギリシア語の *κοιμίζω, ἡ κοιμησις* を *usъnati, usъpenie* で翻訳している」(ibid. 32) ことを指摘している。そして彼は「古ロシアの文章家たちは動詞 *prestavitisě* を完全に自分のものとし、どんなときも、とくに公や聖職者たち、あるいはその関係者たちの死が問題となるときには、この動詞を用いた。さらには、時としてこの動詞の接頭辞を東スラブ風の *pere-* に変えて使用することもあった」(ibid.) として『ノヴゴロド第1年代記』からの

48) 彼は *sъkonьčatisě* については「*umřěti* と並んで『過ぎし年月の物語』の中では *sъkonьčatisě* という動詞も使用される。この *sъkonьčatisě* という動詞が生きた東スラブ語において「死ぬ」という意味で使用されていたかどうかは明らかでないが、『過ぎし年月の物語』の伝説部分での使用が観察される」(L'vov 1975: 31) とし、本稿でも 38) に引いた年代成立以前のキー、シチェク、ホリフの死の記事を引いている。さらに彼は「古教会スラブ語文献ではこの動詞の使用は非常に希であり、比喩的に *umřěti* の意味で使用されるようになったと思われる」(ibid) としている。

49) 引用中の *pre-, prestavitisě* という形はリヴォフの原文のまま。

例を引いている⁵⁰⁾。

この *prěstavitišę* という語は本来空間的な移動を表す動詞だった⁵¹⁾。それが *na věčnoe žitie* 「永遠の生へ」のような補語を伴って「現世」から「彼の世界」への（比喩的な）移動を意味するようになり、さらに「彼の世界」を表す補語なしで現れて「死ぬ」という意味で使われるようになったと考えられる。例えば9世紀末に成立したと考えられる⁵²⁾『キリル伝』では、キリルの死に際して *prěstavitišę na věčnoe žitie* という表現が使用されている：(XVIII-2, 3) *I jako sę približi godina da pokoi priimъ prestavit (pr.3sg.< prěstavitišę) sę na věčnoe žitie. (i) vъzdvigъ kъ Bogu rucę svoi sъtvori molitvu sъ sledzami, sice glagolę [...] I tako počī (aor.3sg.< počiti) o Gospodě, byvъ lět čtyredeset i dva, vъ četvertyi na deset(e) denъ mēšęca fevruaria, vъ indikt 3, ot tvari vъsego mira v*

50) ただし *perestavitisja* という東スラブ系の形式は、実際にはそれほど頻繁に現れるわけではない。筆者の数えたところではこの形式は『過ぎし年月の物語』では1例も現れず、『ノヴゴロド第1年代記（古輯）』では3例を数えるのみである。本文中の「95）『ノヴゴロド第1年代記（古輯）』に現れる公とその一族、教会の指導者たち、ノヴゴロドの市民たちの死」に示したとおり6688(1180)年、6696(1188)年、6700(1192)年の記事の3箇所である。なお『ノヴゴロド第1年代記（新輯）』にはこの形は一度も現れない。6688(1180)年のムスチスラフ・ロスチスラヴィチの死については *prestavisja* という形が現れ、6696(1188)年の司祭ヴォヤタ（ゲルマン）の死、6700(1192)年の尼僧院長マリヤの死については対応する記事そのものが現れない。このことから *perestavitisja* という動詞は東スラブで日常使われていた形式というより、南スラブ起源の *prěstavitišę* の接頭辞 *prě-* を東スラブ風に書き改めただけの形式である可能性も出てくる。あるいは写字生の書き誤りにより偶発的に生じた形式であったかも知れない。一方でこのような南スラブ系の接頭辞 *prě-* を持つ一群の動詞と、本来東スラブ語にもあったのか南スラブ系の語彙から人工的に作られたのかは別として、東スラブ系の接頭辞 *pere-* を持つ一群の動詞が対応して現れる例が多く存在することも事実である。ヴラストは両方のグループの意味的な違いについて、南スラブ系の形式を持つグループは *metaphorical* に使用されるとし、次のような例を挙げて両者を対比させる（*pre-* という表記、*-sja* という表記は Vlasto 自身による）：
perestupiti porog “cross the threshold” : *prestupiti zakon* “transgress the law”, *perestaviti* “transpose” : *prestavit'sja* “pass over, die”, *peregorodit' / peregoraživat'* “partition off” : *pregorodit' / pregraždat' put'* “bar the way”, *peredat'* “hand over, communicate” : *predat' ognju* “consign to the flames”; “betray”. 彼は教会スラブ語形式の *prestavitisja* をギリシア語 μετατίθεσθαι の calque とし、その名詞形 *prestavlenie* に “decease” という意味を与え formal word としている。cf. Vlasto (1988: 224).

51) 上の7) に引いた *prěstavitišę* の意味、とくにスレズネフスキーの記述を参照。

52) 例えばレール・スプワヴィンスキは、『キリル伝』は869年2月14日のキリルの死の直後、また『メトディオス伝』は885年4月のメトディオスの死後間をおかずしてモラヴィアで成立したとする。cf. Lehr-Spławiński (1959: xxiii-xxiv, xxvi).

lěto 6377. (Vaillant 1968: 39) 「そして、(彼が) 平安を得、永遠の生命へと移るその時が近づくと、(彼は) 神の方に向かって両手を挙げ、涙ながらに祈り、こう言った…このようにして(彼は) 神の御許に憩った。彼は42歳であり、世界の初めから数えて6377年(西暦869年)、インディクトの第3年、2月14日のことであった」。なおここでは彼の死そのものは *počiti o gospodě* 「神に依って休む」という表現を用いて表されている⁵³⁾。また『メトディオス伝』の冒頭の聖書の内容を簡略にまとめた部分で、創世記5.24にあるエノクが、死ぬことなく神の御許に召されたというエピソードでも次のように同じ *prěstavitisě* が使用されている：(I-3) *Enochъ že po tomъ ugožь Bogu prěstavlennъ* (Past.Prt.Pass.< *prěstaviti*) *bystъ* (aor.3sg.< *byti*). (Vaillant 1968: 42) 「エノクはその後神によるこばれ、(天に) 移された」。リヴォフもまた「動詞 *prěstavitisě* は始原的には『人間の霊の移動』というキリスト教的概念を意味する語彙と結合して使用された。例： *Ot sego žitija prěstaviti sě*; *Ot žitija prěstavisě* (ギリシア語 τοῦ βίου ὑπεξέρχεται の翻訳)、*prěstavisě kъ b(og)ъ prěstavisě vъ věčnyi...životъ*; *prěstavisě vъ mirъ*。そこからさらに、*Elisěi prěstavisě* (Chr. G. Am., l. 210 g.); *prěstavisě kjurilъ* (nadpis' 1278 g.) etc.」(という単独での使用が現れた) としている。cf. L'vov (1975: 32).⁵⁴⁾

53) 『過ぎし年月の物語』の6582(1074)年の記事「パチェルスキー修道院の僧たちの物語」でも長老(stareць)マトフェイの死を表すために *počiti v starosti* 「老年において休息をとる」という類似の表現が使われている。cf. 注90) 例ii)。

54) この *prěstavitisě* という動詞が『過ぎし年月の物語』の中では比較的遅く使われるようになったこと、一方でこの表現が「キリスト教徒の死に対する敬意」を表す可能性があるという点に関連して、本来の古教会スラブ語のテキスト、福音書中でイエスの死がどのように表現されているか確認しておく必要があるだろう。4福音書を見ると、それぞれで次のようになっている(引用はCodex marianusより)。i) Mt.27.50. *i(su)sъ že vъzъpivъ gl(a)s(o)mъ vъlēmъ ispusti* (aor.3sg.<*ispustiti*) *d(u)chъ*。 「イエスは大声で叫んで、息を引きとった」、ii) Mk.15.37. *i(su)sъ že puščъ glasъ velii izdъše* (aor.3sg.< *izdъchnati*)。 「イエスは大声で叫んで、息絶えた」、iii) Lk.23.46. *i vъzglāšъ glasomъ veliemъ i(su)sъ. reče. otъče vъ rāčě tvoi prědajā d(u)chъ moi. i se rekъ izdъše* (aor.3sg.< *izdъchnati*)。 「そのとき、イエスは大声で叫んで言った、『父よ、私の魂をあなたの手にゆだねます』。こう言って息絶えた」、iv) Jn.19.30. *egda že prijetъ ocyta i(su)sъ. reče. sъvъrši sě. i prěklonъ glavā prědastъ* (aor.3sg.< *prědati*) *d(u)chъ*。 「イエスはそのぶどう酒を受けて、『すべてが成就した』と言い、頭を垂れて息を引き取った」。すなわち福音書ではイエスが十字架に付けられて死ぬ情景はすべて *ispustiti duchъ*, *prědati duchъ*, *izdъchnati* という(後述の)「息を引き取る」系統の語彙で表現されていることになる。この情景は、『過ぎし年月の物語』の6494(986)年の記事でグレキの伝道団が語る聖書の抜粋物語の中では次のように

2.3. 死を表す他の表現

—sъkonьčatisę, съkonьčati životъ svoj, předati dušju svoju Bogu—

2.3.1. съkonьčatisę

実は、この語の使用はそれほど多くない。従って、あまり明確なことは言えない。死因については、以下に見るとおり、病死の場合も、誰かに殺害された場合も使用可能である。その意味では、この語は umřeti と同じである⁵⁵⁾。

2.3.1.1. 病死の場合

次は、ルシに国教としてキリスト教を受け入れたヴラヂミル聖公 (06) の死の情景である。まず съkonьčatisę によって彼が死んだことが示され、ついで彼がベレストヴォで死んだという詳細、補助的情報を伝える時には umřeti が使用されている。

35) 6523(1015)年 ヴラヂミル(06)の死

Pečeněgom idušcemъ na Rusъ. posla protivu imъ Borisa. samъ bo boleše velmi. v neize bolesti i skončasę. m(ě)s(ja)ca. iulę. vъ 15 d(e)нъ. Umre [že na Berestověмъ. i potaiša i. bě bo S(vja)topolkъ Kyjevě. (PVL: 130-17)

ペチェネギがルシに向かって兵を進めたので、(ヴラヂミル(06)は) 彼らに向かってボリス(14)を派遣した。自分が重病だったからである。彼はその病によって7月15日に生涯を終えた。彼はベレストヴォで死に、(人々は) 彼(の死)を隠し

記されている。v) 6494(986)年: oni že poimše I(su)sa. vedoša na město kranьjevo. [i] raspěša i tu bys(tь) tьma po vsej zemli. ot 6-go čas(a). do 9-go. i pri devětom časě ispusti d(u)chъ Is(u)съ. (PVL: 103-26) 「彼らはされこうべの場所にイエスを連れて行き、そこで彼を磔にしました。6刻から9刻まで地上全体が闇になり、9刻にイエスは息絶えられました」。ここでも同じタイプの表現が使用されていることになる。

55) 2.2.3で přestavitisę という本来空間的移動を表す語が比喩的な移動先を表す前置詞句を伴った přestavitisę na věčnoe žitie 「永遠の生命へと移る」のようなタイプの表現を経て、再帰動詞単独で「死ぬ」という意味を表すようになった、という考えを示した。再帰動詞 съkonьčatisę が「死ぬ」という意味を持つようになった過程もこれと並行的に考えることができる。その場合の中間段階の表現として捉えられるのが次節2.3.2.で見る съkonьčati životъ svoj 「自分の生涯を終える」タイプの直接目的語を伴った表現である。

た。スヴァトポルク(07)がキエフにいたからである。

次は、6582(1074)年のペチェルスキー修道院の事跡中で、院長アントニーによって誤って死んだものと見なされたイサーキーが、その事件よりも後、実際に死んだ時のことである。まず、彼が死んだという事実が *sъkonьčati žitъje svoje* 「自分の生を終える」という表現を用いて述べられ⁵⁶⁾、ついでその死が *sъkonьčatisę* を用いて再確認される。

36) 6582(1074)年 ペチェルスキー修道院の修道僧イサーキーの死

Potomъ poča žiti krěplě. i vъzderžanъje iměti. počenъje [i] bděnъje. i tako živuščju jemu. skonča (aor.3sg.< *sъkonьčati*) žitъje svoje. i razbolěse v pečere i nesoša i bolna v manastyрь. i do osmago dne o G(o)s(pod)ě skončase (aor.3sg.< *sъkonьčatisę*). (PVL: 198-1)

その後彼はますますしっかりと生き、節制、精進、終夜の祈りを行うようになった。このように彼は暮して自分の生涯を終えた。彼が洞窟の中で病気になったので(人々は)病気の彼を修道院に運んだ。彼は主の日の8日前に亡くなった。

2.3.1.2. 病死以外の場合

次はルシ・ロシアにおいて最初のキリスト教の聖人となったボリスとグレブ兄弟のボリスの殺害のシーンである。刺客たちの動作・行動を表す *probošti* 「突き貫く」、*ubiti* 「殺す」、*pronьzti* 「突き刺す」という他動詞を用いてその様子は事細かに描かれる。そして最後に彼が死んだことが *sъkonьčatisę* という動詞の使用によって確認される。ここで *prěstavitisę* が使用されていないことに注意したい。

37) 6523(1015)年 ボリス(14)の殺害

i se napadoša aky zvěryje divii okolo šatra. i nasunuša i kopъi. i probodoša (aor.3pl.< *probošti*) Borisa i slugu jeho. padša na nem probodoša s nimъ. bě bo se ljubimъ

56) この表現については次節2.3.2.を参照。

Borisomъ. [...] Borisa že ubivše (Past.Prt.Act.< ubiti) okanъnii uvertěvše v šaterъ. vъzloživše na kola povezoša i. i ješče dyšjuščju jemu. uvěděvše že se okanъnyi S(vja)topolkъ jako ješče dyšetъ. posla dva Varęga prikončatъ jeho. oněma že prišedšema [i viděvšema]. jako i ješče živъ jestъ. jedinъ jeju izvlekъ mečъ pronъze (aor.3sg.< pronъzti) i kъ s(e)rdcju. i tako skončase (aor.3sg.< sъkonъčati) bl(a)ž(e)nyi Borisъ. vĕnecъ prijemъ ot Ch(ri)s(t)a B(og)a sъ pravednymi. pričetъse sъ pr(o)r(o)ky i ap(o)s(to)ly. s liky m(u)č(e)n(i)čъskymi vodvarejasę. Avramu na loně počivaja. vidę neizdrečennuju radostъ. vъspěvaja sъ ang(e)ly. i veselęse v liku s(vja)tychъ. (PVL: 134-1)

すると（人々は）野獣のように幕舎の周りに押し寄せて（幕舎に）槍を突き刺し、ボリス(14)と彼の上に身を投げ掛けた彼の従者とを共に刺し貫いた。この者がボリス(14)に愛されていたからである。[...] 呪われた者たちはボリス(14)を殺して天幕にくるみ、彼の息がまだあるうちに車にのせて彼を運んだ。呪われたスヴァトポルク(07)は息がまだあるのを知って、彼に止めを刺すために2人のヴァリヤギを派遣した。この者たちが着いて彼がまだ生きているのを「見ると」、彼らの1人が剣を抜いて彼の心臓に突き刺した。こうして至福なボリス(14)は生涯を終えた。神キリストから正しい人々と共に冠を受け、預言者や使徒の中に列せられ、殉教者の数に加えられてアブラハムの懷（天国）に憩い、言い尽せない喜びを見ながら天使と共に（神を）讃え、聖者の1人として楽しんでいるのである。

2.3.2. sъkonъčati životъ svoi, sъkonъčati žitъje svoje

seのついた再帰動詞と並んで、他動詞のままで所有の再帰代名詞と「生、生命」という意味の名詞からなる目的語をとったsъkonъčati životъ svoi/ žitъje svoje「自らの生涯を終える」という表現がある。時にはsъkonъčatisęと同じ文脈に連続して現れることもあり、同じ意味、用法を持つと考えられる⁵⁷⁾。

57) 後述のprĕdati duchъ他の表現の使用と関連して、前節で見たsъkonъčatisę、またここで見るとsъkonъčati životъ svoi他の表現が、当該人物の死の最後の瞬間を描く表現であるかどうかについてはいはっきりしない。次にあげる幾つかの例では、死に至る最後の情景の描写は行われてお

次は、キエフの始祖キー、シチェク、ホリフ 3 兄弟の一人キーの死である。続いて記されるシチェク、ホリフ、ルィベヂの死については再帰動詞 *sъkonьčatisę* が使用されている。

38) 年代以前 キエフの始祖キーの死

Kievi že prišedšju vъ svoi gradъ Kijevъ. tu životъ svoi skonča (aor.3sg.< *sъkonьčati*) a bratъ jeho Ščekъ i Chorivъ i sestra ich Lybedъ tu skončašasę (aor.3pl.< *sъkonьčatisę*). (PVL: 10-12)

キーは自分の町キエフに帰り着き、そこで一生を終えた。また彼の弟シチェクとホリフおよび彼らの妹ルィベヂも、そこで生涯を終えた。

次は、キエフ・ペチェルスキー修道院の開祖アントニーの生涯の最後の様子である。死の直前の様子は特別には描かれておらず、死因も明確にされていないが、病死・老衰であることは明らかである。6559 (1051) 年の記事、ペチェルスキー修道院成立の由来の中で述べられているが、彼が実際に死んだのが何年のことであるかは不明である。

39) 6559 (1051) 年 ペチェルスキー修道院開祖アントニーの死

i postavi imъ igumenomъ Varlama. a samъ ide v goru i iskopa pečeru. jaže jestъ podъ novymъ manastyrem. v neiže skonča životъ svoi. živъ v dobroděteli. ne vychodę is pečery. lēt(o) 40 nikděže. v neiže ležatъ moščę jeho i do sego dne. (PVL: 158-2)

彼はヴァルラムを彼らの修道院長に任命し、自らは山に行つて洞窟を掘った。それは新しい修道院の下に（いまも）あるが、その中で彼は40年の間洞窟からどこにも出ず、徳行のうちに生活して自分の生涯を終えた。その中にいまでも彼の遺体が横たわっている。

らず、特に「息を引き取った」というニュアンスがあるとは感じられない。また、上で修道僧イサーキーの死について *sъkonьčati žitъje svoje* と再帰動詞 *sъkonьčatisę* が連続して現れるケースを見たが、その際も、2つめの *sъkonьčatisę* が「息を引き取る」瞬間を描写しているのか、単に死んだことを確認しているのかは分らない。

sъkonьčatisę, съkonьčati žitije svoje と umьrěti は死因を問わないという点で共通している。その差違については、ここで見つかった小数の例から確定的なことは言えないが、敬意の有無、すなわち съkonьčatisę グループの使用に際しては何らかの敬意が感じられるという点を挙げることができるだろう。ただし、この敬意が přestavitisę の場合と同じキリスト教徒としての死に対する敬意であるかどうかという点についてははっきりしない。

2.3.3. předati dušju svoju Bogu 「自分の魂を神に委ねる」、předati dušju v ruce božii 「魂を神の手に委ねる」

いま一つの「死ぬ」という意味の自動詞的な表現⁵⁸⁾ が předati dušju svoju Bogu 「自分の魂を神に委ねる」のグループである。

次は、6552(1054)年の記事で、ヤロスラフ賢公(13)の死の様子が描かれる。すでに上の28)で引いた通り、この年の記事の冒頭で přestavitisę を用いて Vь lět(o) 1054. Prestavisę (aor.3sg.< přestavitisę) velikyi knęzъ Rusьskyi Jaroslavъ. i ješče bo živuščju jemu. narędi s(y)ny svoja rekъ imъ. 「6562(1054)年 ルシの大公ヤロスラフ(13)が亡くなった。彼がまだ生きている間に彼は自分の息子たちに教えて…」というように彼が死んだことが告げられる。その後、息子たちに対する遺言と彼の病気の様子が具体的に描かれ、最後に předati dušju svoju Bogu という表現でその描写が終わる。

40) 6562(1054)年 ヤロスラフ賢公(13)の死

V lě(to) 6562. Prestavisę (aor.3sg.< přestavitisę) velikyi knęzъ Rusьskyi Jaroslavъ. i ješče bo živuščju jemu. narędi s(y)ny svoja rekъ imъ. “se azъ otchožju světa sego s(y)n(o)ve moi. iměite v sobě ljubovъ. [...] i tako urędi s(y)ny svoja prebyvati v ljubvi. samomu že bolnu suščju. i prišedšju Vyšegorodu razbolěsę velmi. [...] Vse[vo]lodu že togda suščju u o(t)cę. bě bo ljubimъ o(t)cemъ pače vseje bratъ. je že iměše prisno u sobe. Jaroslavъ že prispě konecъ žitъja i predastъ (aor.3sg.< předati)

58) předati dušju svoju Bogu 「自分の魂を神に委ねる」という全体の意味が「自動詞的」になるということであって、統語的には対格の直接目的語を伴う他動詞構文である。

d(u)šju svoju [B(og)u]. v subotu 1 pos(ta). s(vja)tago Feodora. (PVL: 161-1)

6562(1054)年 ルシの大公ヤロスラフ(13)が亡くなった。彼がまだ生きている間に彼は自分の息子たちに教えて、「私の息子たちよ、見なさい、私はこの世を去ろうとしている。お互いに愛を持て。[...]そして彼は自分の息子たちに愛し合って過すようにと教えた。(ヤロスラフは)自分が病気であったのにヴィシェゴロドにやって来たので、病が重くなった。[...]フセヴォロド(D)はその時父のもとにいた。彼がどの兄弟よりも父に愛されていたからであり、(父が)彼をいつも自分のもとにおいていたからである。ヤロスラフ(13)に最期が近づき、彼は聖フェオドル精進期の第1土曜日に自分の魂を〔神に〕委ねた。

次は、6582(1074)年の記事に現れるペチェルスキー修道院院長フェオドシーの最後の様子である。ここでも、29)で示したように、まずこの年の記事の冒頭で Vb lět(o) 6582. Feodosii igumenъ Pečerъskyi prestavise (aor.3sg.< přestavitise). skazemъ že o uspeni jeho malo. 「6582(1074)年 ペチェルスキー修道院長フェオドシーが亡くなった。我々は少し彼の臨終について物語ろう」という彼の死の事実の報告によって「ペチェルスキー修道院の事跡」の物語が始まる。この物語の中で彼の最後の様子が詳細に語られ、死の瞬間が描かれる。次はその部分である。

41) 6582(1074)年 ペチェルスキー修道院長フェオドシーの死

i presědęšči bratě noščь tu u nego. i nastavšju dni osmomu. vъ 2-ju. sub(o)tu. po Pascě. vъ čas 2 dne. Predastь (aor.3sg.< předati) d(u)šju v rucě B(o)žii. m(ě)s(ja)cę. maja. vъ 3 d(e)nъ. indikta. vъ 11 lěto. (PVL: 188-5)

その夜、兄弟僧が彼のもとに座っていて8日目になったとき、復活祭後の第2土曜日の昼の第2刻に、彼は神の御手に魂を委ねた。5月3日、インディクトの11年であった。

次も同じく 6582(1074)年の記事である。フェオドシーの死の記事に続いてペチェルスキー修道院の僧たちの物語が語られる、その中の司祭(prezvuterъ)デミヤンの事跡

の最後の部分、彼の臨終の様子である。ここでは、「両眼を閉じて」というように、死の情景がさらに具体的に描かれる。

42) 6582(1074)年 ペチェルスキー修道院司祭デミヤンの死

on že somžarivъ oči predastъ (aor.3sg.< předati) d(u)chъ v rucě B(o)žii. igumen že i bra(t)ja. pochoroniša tělo jeho. (PVL: 189-26)

彼は両眼を閉じて魂を神の御手に委ねた。修道院長と兄弟僧は彼の遺体を葬った。

以上、この節で見た předati dušju svoju Bogu「自分の魂を神に委ねる」、předati dušju v rucě Božii「自分の魂を神の手に委ねる」という表現は、当該人物が息を引き取る瞬間、臨終の情景を具体的に描く時に多く使われることが分かった⁵⁹⁾。

2.4. 戦争における公たちの死—尋常でない死に方は明示される—

2.4.1. 他動詞の使用

これまで自動詞（的表現）を用いた死の表現について見てきた。しかし、umřeti について2.1.1.2.の議論で触れたように、例えば戦闘などで他者の手に掛かって死んだ人の場合には、その事実が明示されることが多い。結果として、自動詞ではなく、他動詞を用いた表現が多くなる。まず ubiti「殺す」という動詞の使用である。次にその例を挙げる。

43) 6453(945)年 イゴリ(02)がドレブリャネを攻め逆に殺される

i ne posluša ichъ Igorъ. i vyšedše izъ grada Izъkorъstěne. Derevlene ubiša (aor.3pl.< ubiti) Igorъ. i družinu jeho. bě bo ichъ malo. (PVL: 55-5)

イゴリ(02)が彼らのいうことを聞かなかったので、ドレヴリャネはイスコルステニの町から出撃し、イゴリ(02)と彼の従士団を殺した。彼らが少数だったからで

59) 以上の他、人の死を表す「自動詞的」表現として〔下〕の注90)のii)に示す počiti v starosti「老年において休息をとる」、同iii)に示す přijati smerti「死を受け入れる」と言った表現があるが、詳述は避ける。

ある。

- 44) 6480(972)年 スヴァトスラフ(03)がグレキ遠征からの帰途ペチェネギに攻められ戦死する

V lět(o) 6480. poide S(vja)toslavъ v porogi. i napade na nъ Kurę knęzъ Pečeněžskii. i ubiša (aor.3pl.< ubiti) S(vja)toslava. [i] vzěša glavu jeho. i vo lbě jeho sьdělāša čašju. okovaše lobъ jeho. i pьjachu po nemъ. (PVL: 74-4)

6480 (972) 年 スヴァトスラフ (03) が浅瀬に進むと、ペチェネギの公クリャが彼に襲いかかり、スヴァトスラフ (03) を殺した。彼らは彼の首を取り、彼の頭蓋骨に金を張り、杯を作ってそれで飲んだのであった。

6485(977)年、ヤロポルク(04)と兄弟オレグ(05)の戦いで、オレグは堀に突き落とされて死ぬ。彼の死の原因に至った直接の行為は *spechnuša Olъga s mostu v debrъ* 「(人々は) オレグを橋から堀に突き落とした」、*udaviša koni čelověci* 「馬が人を押しつぶした」というように描かれる。ここでは *ubiti* 「殺す」、*umьrěti* 「死んだ」という直接の表現は出てこない。

- 45) 6485(977)年 ヤロポルク(04)との戦闘でオレグ(05)戦死

poběgšju že Olъgu s voi s voi svoimi. vъ gradъ rekoъmi Vručii. bęše čeresъ groblju mostъ ko vratotomъ gradnymъ. tēsnečesę drugъ druga. pichachu vъ groblju. i spechnuša (aor.3pl.< sьpьchnuti) Olъga s mostu v debrъ. padachu ljudъje mnozi. i udaviša (aor.3pl.< udaviti) koni č(e)l(o)v(ě)ci. (PVL: 74-26)

オレグ(05)が自分の軍勢と共にヴルチーといわれる町に逃げてくると、町の門に通じる橋が堀に架かっていたが、彼らはひしめき堀に突き落とし合った。オレグ(05)も橋から堀に突き落された。多くの人が落ち、馬が人を押し潰した。

ubiti 「殺す」が受け身の形で使用されることもある。

46) 6488(980)年 ヴラヂミル(06)がヤロ波尔ク(04)を殺す

i ne posluša jeho. i pride Jaropolkъ къ Volodimeru. jako polěze vъ dveri. i podъjasta i dva Varęga mečъmi podъ pazusě. Bludъ že zatvori dveri. i ne da po nemъ iti svoimъ. i tako ubъjenъ (Past.Prt.Pass.< ubiti) bys(ъ) (aor.3sg.< byti) Jaropolkъ. (PVL: 78-10)

だがヤロ波尔ク(04)は彼の言うことを聞かず、ヴラヂミル(06)のもとにやって来た。戸口に入ると2人のヴァリヤギが彼の胸元に剣を突き付けた。ブルドは扉を閉めて、家臣たちが彼に続いて行くのを許さなかった。こうしてヤロ波尔ク(04)は殺された。

次は、上で触れた、ロシアにおける最初の聖人ボリスとグレブの兄弟のグレブの方の死の場面である。ここでも、zarězati「斬る」という他動詞を用いて具体的な描写が行われている。さらに彼の死はubъjenu (DAbs.Past.Prt.Pass.< ubiti) byvšju (DAbs.Past.Prt.Act.< byti)というように他動詞ubitiの受身の形（の絶対与格）で確認されている。

47) 6523(1015)年 スヴァト波尔ク(07)の命令によるグレブ(15)の殺害

povarъ že Glěbovъ imenemъ Torčīnъ. vynezъ nožъ zarěza (aor.3sg.< zarězati) Glěba. aky agnę neporočno. prinesesę na žertvu B(ogo)vi v vonju bl(a)gouchanъja. žertva slovesnaja. i prija vĕnecъ všedъ vъ n(e)b(e)snyja obiteli. i uzrĕ želajemago brata svojego. i radovašesę s nimъ neizdrečēnъnoju radostъju. juže ulučista bratoljubъjemъ svoimъ. [...] Glěbu že ubъjenu (DAbs.Past.Prt.Pass.< ubiti) byvšju (DAbs.Past.Prt.Act.< byti). i poverženu na brezĕ. mezi dvěma kolodama. (PVL: 136-20)

グレブ(15)の料理人で名をトルチンという者が庖丁を持ち出してグレブ(15)を斬り殺した。(グレブは)言葉を話す生贄として、よい香に包まれ、小羊のように罪のないのに神の生贄に供えられ、冠を受けたのである。彼は天国の住人たちの中に加わり、望んでいた自分の兄を見て、自分たちの兄弟愛によって得た言いがたい喜びを彼と共に喜んだのであった。[...] グレブ(15)は殺されて川岸の2本の丸太

の間に捨てられた。

次はフセヴォロド(D)の時代にリャヒから戻ってきたヴラヂミリ公ヤロポルク(B2)がズヴェニゴロドという町で刺客によって殺されるシーンである。ここで彼がネラデツの手に掛かるシーンは実に生き生きと描写される。さらに彼(の遺体)がヴラヂミリを通してキエフに運ばれ、聖ペテロ教会に葬られるところまでが具体的に描かれる。ただし、彼がどの時点で息を引きとったのかは明らかでない。

48) 6594(1086)年 ヤロポルク(B2)がネラデツによって暗殺される

i peresēdev malo dni. ide Zvenigorodu. i ne došedšju jemu grada. i probodenъ (Past.Prt.Pass.< probosti) bys(тъ) (aor.3sg.< byti) ot proklętago Neradъcę. ot dъjavolę naučeniъja. i ot zlychъ č(e)l(o)v(ě)kъ. Ležaščju i tu na vozě sableju s konę probode (aor.3sg.< probosti) i. m(ě)s(ja)ca. nojambre. vъ. 22 d(e)нь. I togda vъzdvignuvъsę Jaropolkъ. vytorgnu izъ sebe sablju. i vozpi velikym gl(a)s(o)mъ “ochъ tot mę vraže ulovi.” (PVL:206-4)

彼(ヤロポルク)は数日ただけでズヴェニゴロドに行った。彼が町に到着しないうちに、悪魔の唆しと邪悪な人々のために、彼は呪われたネラデツによって突き刺された。彼が輜重車の上で横になっていると、(ネラデツが)サーベルで馬の上から彼を突き刺したのである。11月22日のことであった。その時ヤロポルク(B2)は起き上がり、自分の身体からサーベルを引き抜いて大声で、「おお、敵よ、私を捕えたな」と絶叫した。

2.4.2. 自動詞の使用

戦闘中の死であっても、死に方の如何によっては自動詞で表現されることもある。例えば次は、スヴァトポルク(B3)治下、攻めてきたポロフツィに勇敢に立ち向かったものの、不運にも溺れ死んだロスチスラフ(D2)の例である。

49) 6601(1093)年 ポロフツィとの戦闘でロスチスラフ(D2)が溺死

i vbrede Vododimerъ s Rostislavomъ. [i] nača utapati Rostislavъ. pred očima Volodimerima. i chotě pochvatiti brata svojego i malo ne utope samъ. i utope (aor.3sg.< utonuti) Rostislavъ s(y)nъ Vsevoložъ. (PVL: 220-16)

ヴラヂミル(D1)はロスチスラフ(D2)と共に川に入ったがロスチスラフ(D2)がヴラヂミル(D1)の目の前で溺れだした。(ヴラヂミルは) 弟をつかまえようとして、自分も危うく溺れるところであった。フセヴォロドの子ロスチスラフ(D2)は溺れた。

2.5. 無名の人々の死

戦争により、あるいは戦闘中に死んだ人々については多くの場合、敵であれ味方であれ、また公の一族、貴族たち、庶民を問わず、その死に方がはっきり分かるような形で書かれている。ただ、公以外の場合、少数の例外を除けば、いちいち名前を挙げて一般市民の死が記録されることはない。通常は「○人の人が殺された」「多数の人が殺された」という形が取られる。動詞としては、いずれの場合も ubiša 「(人々が) 殺した」と表現されることが多い。稀にはあるが自動詞が使用される場合には umřěti が使用され、具体的な戦闘行為が描かれていてかつ přestaviti se が使用される例はやはり皆無である。

最初の例は、ヤロ波尔ク(04)の治下、その弟のオレグが自分の獵場を荒らしたスヴェネリドの息子リュトという人物を殺したシーンである⁶⁰⁾。

50) 6483(975)年 オレグ(05)がスヴェネリドの子リュトを殺す

i řeša jemu “Svěnaldičъ.” i začchavъ ubi (aor.3sg.< ubiti) i. bě bo lovy děja Olegъ. (PVL: 74-15)

(人々が) 彼に「スヴェネリドの子です」と言ったので、(オレグは) 馬を寄せて彼を殺した。オレグ(05)がいつも狩をしている所だったからである。

60) 後続部分には、リュトの父親スヴェネリドが息子の復讐のためにヤロ波尔クがオレグに対立するよう仕向けたという記述がある。このことから見て、このリュトが全くの無名の人物、庶民ということは言えない。スヴェネリドとリュトの親子はキエフの貴族(bojarin)であったと考えられる。

また、極めてまれではあるが、戦争で倒れた市民がきちんと名前を挙げて記録に留められることもある。次は、イジャスラフ (B) 治下、6586 (1078) 年にスヴァトスラフ (C) の子オレグ (C4) とボリス (E1) がポロフツィの助けを得てフセヴォロド (D) を攻めたときのことである。この時戦死したフセヴォロド (D) 側の人々は「ジロスラフの子イヴァン、チュヂンの兄弟トゥクィ、ポレイ、その他の多くの者たち」という形で名前を挙げられている。

51) 6586 (1078) 年 オレグとの戦争に倒れたキエフの市民たち

Vsevolodъ же izide protivu ima. na Sъžicě. i pobědiša Polovci Rusъ. i mnozi ubъjeni (Past.Prt.Pass.< ubiti) byša (aor.3pl.< byti). tu ubъjenъ (Past.Prt.Pass.< ubiti) bys(тъ) (aor.3sg.< byti) Ivanъ Žirosłavičъ. i Tuky Čjudinъ bratъ. [i] Porějani mnozi. i ini mnozi. [m(ě)s(ja)ca avgus(ta)]. въ 25. (PVL: 200-7)

フセヴォロド (D) は彼ら 2 人に向かってソジツァに出撃した。そしてポロフツィがルシの人々を打ち負かし、そこで多くの者たちが殺された。ジロスラフの子イヴァン、チュヂンの兄弟トゥクィ、ポレイ、その他の多くの者たちが [8 月] 25 日に殺された。

しかし通常は次の例のように、死んだ人の人数が示されたり、単に「多くの人々が」という形で言及されるに留まる。

52) 6575 (1067) 年 ネミガ川の戦いで倒れた人々

I běše sněgъ velikъ. [i] poidoša protivu sobě. i bys(тъ) sěča zla i mnozi padoša (aor.3pl.< pasti). i odolěša. Izęslavъ. S(vja)toslavъ. Vsevolodъ. Vseslavъ же beža. (PVL: 166-30)

大雪であったが彼らは互に迎え撃ち、激しい斬り合いになった。多くの者が倒れた。そしてイジャスラフ (B)、スヴァトスラフ (C)、フセヴォロド (D) が勝った⁶¹⁾。

61) 日本古代ロシア研究会による訳では「多くの者が倒れたがフセスラフ (L) は逃げた」となっているがこのように直した。cf. 國本哲男他 (1987: 190)

フセスラフ(L)は逃げた。

53) 6601 (1093) 年 ポロフツィとの戦闘で死んだ人々

Volodimerъ že pebredъ rěku s maloju družinoju mnozi bo padoša (aor.3pl.< pasti)
ot polka jeho i bolere jeho tu padoša (aor.3pl.< pasti). (PVL: 220-20)

川を渡り切ったのはヴラヂミル(D1)と少数の従士団であった。彼の軍勢の多くが
倒れ、貴族もそこで倒れたからである。

54) 6614(1106)年 ジミゴラ⁶²⁾との戦闘で

tomže lět(o). pobědiša Ziměgola. Vseslavičъ vsju bratju. i družiny ubiša (aor.3pl.<
ubiti) 9 tyešěčb. (PVL: 281-21)

同じ年、ジミゴラがフセスラフ(L)の子のすべての兄弟を打ち負かし、従士団
9000人を殺した。

2.6. 悪人・異教徒の死の表現

2.6.1. 他動詞 ubiti、その他の具体的情景を描き出す動詞の使用

2.1.2.で、umrěti「死ぬ」はルシの公や一般市民の死だけでなく、異民族の死についても使用されることを示した。しかしこのことは、年代記作者の立場から見た悪人たちや異教徒の死がつねに umrěti によって表現されることを意味しない。むしろ、ルシの公たちの場合と同じく他動詞 ubiti「殺す」を用いた表現の方が多い。これは、当然のことであるが、異民族の公、首領たちの死がわざわざルシ側の年代記に記録されるとすれば、それは彼らがルシとの戦闘で死んだ場合がもっとも多いという理由による。このような異民族の死、あるいはルシの人であっても年代記作者から見て悪人、裏切り者とされる人物の死について次のような例がある。

55) 6587(1079)年 異民族ポロフツィと結んだロマン(C2)が逆にポロフツィに裏切ら

62) 西ドヴィナ川東岸に居住したリトアニア人およびフィン系エストニア人を指すらしい。

れ殺される。

V lět(o) 6587. Pride Romanъ s Polovci kъ Voinu. Vsevolodъ že sta u Perejaslavlę. i stvori mirъ s Polovci. i vъzvratisę Romanъ s Polovci vъspęť. [i] byvšju jemu. ubiša (aor.3pl.< ubiti) i Polovci. m(ě)s(ja)ca. avgusta 2 d(e)нь. Sutъ kosti jeho i doselě. [ležače tamo]. s(y)na S(vja)toslavlę. vnuka Jaroslavlę. (PVL: 204-13)

6587(1079)年 ロマン(C2)がポロフツィと共にヴォインにやって来た。フセヴォロド(D)がペレヤスラヴリのそばにとどまってポロフツィと和を結んだので、ロマン(C2)はポロフツィと共に引き返した。そしてポロフツィは8月2日に彼を殺した。スヴァトスラフの子、ヤロスラフの孫である彼の骨は「横たわったままそこに」いまでもある。

次は6604(1096)年のポロフツィのルシ侵攻の記事である。なおここでは、*mnozi vrazi naši tu padoša* 「我々の敵の多くがそこで倒れた」という自動詞表現も見られる。

56) 6604(1096)年 トルベジ川の戦いでルシの公たちがポロフツィを打ち破る

i sděja G(o)s(pod)ъ vъ tъ d(e)нь sp(a)s(e)ньje veliko. m(ě)s(ja)ca iulija. vъ 19 d(e)нь. poběženi byša inoplemenъci i knęzę ichъ ubiša (aor.3pl.< ubiti) Tugorkana. i s(y)na jeho. i ini knęzi mnozi vrazi naši tu padoša (aor.3pl.< pasti). (PVL: 231-25)

主はこの日大きな救いを与えられた。7月19日に異教徒が打ち負かされ、彼らの公トゥゴルカン、彼の息子、その他の公が殺され、我々の敵の多くがそこで倒れたのである。

次は、6611(1103)年、スヴァトボルク(B3)の治下、スヴァトボルク(B3)とヴラヂミル(D1)が相談してポロフツィを攻め、その公アルトゥノパならびに彼と一緒にいた者たちを殺した記事である。

57) 6611(1103)年 ルシの人々がポロフツィの公アルトゥノパを攻めて殺す

i usteregoša Ruskiě storoževe Oltunopu. i obistupivъše i. i ubiša (aor.3pl.< ubiti)

Altunopu i suščaja s nim. i ne izbystь ni jedinь. no vs⁶³⁾ izbiša (aor.3pl.< izbiti).

(PVL: 278-18)

ルシの先遣隊はアルトゥノパを待ち伏せて彼を取り囲み、アルトゥノパおよび彼と共にいた者たちを殺した。彼らは1人残らず皆殺しにした。

このあと、ルシの公たちはさらにポロフツィを攻め4月4日の会戦で、その多くの公を殺す。ここでは殺されたポロフツィの公たちの名前も示されている。

58) 6611(1103)年 ルシの人々がポロフツィを攻め、その公20人を殺す

i ubiša (aor.3pl.< ubiti) tu v polku knęzii 20 Urusobu. Kčija. Arъslanapuki. Tanopu. Kumana. Asupa. Kurtka. Čenegrepu. Surъbare. i pročaja knęzii ich. a Beldjužę jaša.

(PVL: 279-5)

この戦いで（人々は）20人の公を殺した。すなわちウルソバ、クチー、アルスラナパ、キタノバ、クマン、アスプ、クルトク、チェネグレパ、スリバリとその他の公であり、ベルヂュズは捕虜にした。

また、実際の殺し方を具体的に描写する動詞を用いる場合も多い。次は、6574(1066)年の記事にある、ロスチスラフ(A1)を奸計をもって毒殺したグレキの将軍⁶⁴⁾をケルソネスの町の人々が石をもって撃ち殺した出来事である。

59) 6574(1066)年 ロスチスラフ(A1)を毒殺したグレキの将軍の死

sego že kotopana pobiša (aor.3pl.< pobiti) kamenьjemъ Korsunьstii ljudьje. (PVL: 166-15)

ケルソネスの人々はこの将軍を石で打ち殺した。

63) 底本テキストの注には「ラブレन्チー年代記写本はこの箇所羊皮紙が途切れこの2文字しか残っていない、vsě（教会スラブ語ではvsja）と読むべきである」（PVL: 277-278 欄外注 ž）とある。リハチョフはvsjaとしている。cf. Lichačev (1996: 118)

64) 例17) を参照。

また、上の例58) で述べた6611(1103)年4月4日の会戦のあと、捕虜となったポロフツィの公ベルヂュズはヴラヂミル(D1)の命令で処刑された。

60) 6611(1103)年 ポロフツィの公ベルヂュズを処刑

i pověľ ubiti i. i tako rasěkoša (aor.3pl.< rasěči) i na udy. (PVL: 279-18)

(ヴラヂミルが) 彼を殺すように命じたので、(人々は) 彼を斬り殺して4肢をばらばらにした。

また、ルシの公たち、市民たちの場合と同じく、戦闘中に溺れ死んだという記述も見つかる。

61) 6605(1097)年 ルシの内乱に介入したウグリ、すなわちハンガリー人たちの死

i poběgoša Ugri. i mnozi istopoša (aor.3pl.< istopnuti) v Věgru. a družii v Sanu. (PVL: 271-19)

そこでウグリは逃げ、多くの者はヴァグル(川)で、他の者はサン(川)で溺れ死んだ。

2.6.2. 異教徒・悪人たちの死を表す特別の表現

6603(1095)年の記事では、スヴァトポルク(B1)の治下、和平のためにルシにやってきた2人のポロフツィの使者クイタンとイトラリをルシの人々がヴラヂミル(D1)の指揮のもと謀殺する様子が描かれる。2.6.1.で見たのと同じく、他動詞ubiti「殺す」を用いた表現と、具体的な殺し方を描く動詞を用いた表現の両方が使用されている。ルシの人々は、ポロフツィに人質として与えたヴラヂミルの息子スヴァトスラフ(D13)を前もって逃れさせ、その後でまずクイタンを殺す。

62) 6603(1095)年 ポロフツィの使者クイタンの殺害

[i] vykradše perwoje S(vja)toslava. potomъ ubiša (aor.3pl.< ubiti) Kytana i družinu jeho izbiša (aor.3pl.< izbiti). (PVL: 227-20)

彼らはまずスヴァトスラフ(D13)を盗み出し、その後でウィタンを殺し、彼の従士団を皆殺しにした。

ついで、もう一人の使者イトラリを殺す。ここでは、ラチボルの子オリベグという兵士が *priima lukъ svoi i naloživъ strělu. udari (aor.3sg.< udariti) Itlarę v s(e)rdce* 「自分の弓を取り、矢をつがえ、イトラリの心臓を撃つ」様子が具体的に描き出される。さらにそのあとで *isprovrěšči životъ svoi zlě* という表現を用い、*i tako zlě isproverže (aor.3sg.< isprovrěšči) životъ svoi Itlarъ* 「このようにしてイトラリは自分の命を失ったのである」という形でその死が確認される⁶⁵⁾。

63) 6603(1095)年 イトラリの殺害

vъzlězše na istobku prokopaša i verchъ. i tako Olъbegъ Ratiboričъ. priima lukъ svoi i naloživъ strělu. udari (aor.3sg.< udariti) Itlarę v s(e)rdce i družinu jeho vsju izbiša (aor.3pl.< izbiti). i tako zlě isproverže (aor.3sg.< isprovrěšči) životъ svoi Itlarъ. V ned(e)lju. syropus(t)nuju. vъ čas 1 dne. m(ě)s(ja)ca. fevralę. vъ 24 d(e)нъ. (PVL: 228-8)
(人々は) 小屋の上に昇り、屋根に穴をあけた。そうしておいてラチボルの子オリベグが自分の弓をとり、矢をつがえてイトラリの心臓を射た。そして(人々は) 彼の従士団をすべて殺した。このようにしてイトラリは自分の命を失ったのである。謝肉祭の日曜日、昼の1刻、2月24日であった。

この *isprovrěšči životъ svoi* という表現は『過ぎし年月の物語』中でもう一例出てくる。次に示すように6527(1019)年の記事に現れるヴラヂミル(06)の死後、権力を独り占めするために弟ボリス(14)とグレブ(15)を殺した「呪われし者」スヴァトボルク(07)の死を伝えるためである。ここでスヴァトボルクはすでにキエフ大公としての実権を

65) スレズネフスキーでは *isprovrěšči* について: 1) μεταβάλλειν, *prevrašcat'* 「別のものに変える」, 2) *I priběže v pustynju mežju Čachy i Lęchy, tu isproverže životъ svoi zlyi. Iak. Bor. Gl. 102b.* (例のみ、意味の記述なし。この例は本稿で64)に引くスヴァトボルクの死について別のテキスト (*Iakova Mnicha skazanie o Borisě i Glěbě vъ sr. XII v.*) から引いたものである), 3) *oprokinut'* 「ひっくり返す」、と記されている。cf. Sreznevski (t.1, 1135).

失い、弟スヴァトスラフとのリト川の決戦にも破れ、敗走の途中ついに死ぬことになる。

64) 6527(1019)年 呪われし者スヴァトポルク(07)の死

ne možaše terpěti na jedinomъ městě. i proběža Lědъskuju zemlju. gonimъ B(ož)ymъ gněvomъ. priběža v pustynju. mežju Lěchy i Čechy. isproverže (aor.3sg.< isprovrěšči) zlē životъ svoi [v tomъ městě]. (PVL: 145-9)

彼は一か所に（とどまることに）耐えられず、神の怒りに追われてリャビの国を通り、リャビとチェヒの間の荒野に逃げて来て、悲惨の内に自分の生涯を「そこで」終えた。

これら2つの例から見ると、勿論これら2つのみから断定することは困難であるものの、この isprovrěšči životъ svoi という表現は、悪人や異教徒の死を表すために専ら使用される形式である可能性がある⁶⁶⁾。

66) 本文中では扱わなかったが pogybnuti 「滅びる」という自動詞がある。これは本来は必ずしも悪人や異教徒の死と結びつく表現ではない。しかしその実際の使用を見ると、次の例に示すように個人について使われる場合には、悪人や異教徒の死を表す場合が多いことが観察される。なお ii) と iii) では ubiti という他動詞と pogybnuti という自動詞の両方が使われている。i) 6599 (1091) 年 [ロストフに現れた妖術師の死] V se že lěto. volchvъ javisę Rostově. iže vskorě pogybe (aor.3sg.< pogybnuti). (PVL: 214-24) 「この年に妖術師がロストフに現われたが、まもなく死んだ」。ii) 6579 (1071) 年 [ヤロスラヴリに現れた2人の魔術師の死] oni že poimše ubiša (aor.3pl.< ubiti) ja. i pověsiša je na dubě otmъstje priimše ot B(og)a po pravdě. Janevi že idušču domovi. v druguju noščь. medvěďъ vzlězъ ugryzъ jeju i sněstъ. i tako pogybnusta (aor.3du.< pogybnuti) nauščenъjemъ běsovъskym. iněmъ vědušče a svojeje paguby ne věduče. (PVL: 178-15) 「(人々は) 彼らを捕えて殺し、これを樅の木につるした。(この者たちは) 神から正しく報いを受けたのである。ヤンが帰途につくと、次の夜熊がよじ登り、彼らをかみ裂いて食べてしまった。こうして2人は他人の(破滅)は知りながら自分の破滅を知らずに、悪魔の唆しによって滅びたのである」。iii) 6605 (1097) 年 [ルシの内紛に介入したウグリ、すなわちハンガリー人たちの死] [i. běžašče vozlē Sanъ u goru, i spichachu drugъ druga] i gnaša po nich 2 dni sěkušče. tu že ubiša (aor.3pl.< ubiti) i (e)p(i)s(ko)pa ichъ. Kupana. i ot bolęřъ mnogy. gl(agola)chu bo jako pogyblo (l-Prt.< pogybnuti) ichъ 40 tysęščь. (PVL: 271-20) 「[そして彼らは互いに突きのけながらサン(川)の岸伝いに山に逃げた。](ボニャクらは彼らを)殺しながら彼らの後を2日間追ひ、そこで彼らの主教クパンと多くの貴族を殺した。彼らの4万人が死ん

2.7. 直接話法中に現れる死の表現

2.7.1. 直接引用のなかで使用される自動詞 umřěti

以上、地の文に現れる死を表す表現について見てきたが、ここでは直接引用された登場人物の言葉の中で、言い換えれば話し言葉において、人の死がどのように表現されているかを見てみる。その際、使者による伝言あるいは手紙文、さらには6604(1096)年の記事中に挿入されている「モノマフの教訓」、「モノマフの手紙」も直接引用された登場人物の言葉として扱うことにする⁶⁷⁾。

テキストを観察した結果、直接引用されている登場人物の言葉のなかでは umřěti が死因を問わず、また言及されている人物の身分・立場によらず、そして話し手と言及されている人物の関係によらず標準的に使用されること、přestavitise の使用は非常に稀であることが分かる。

2.7.1.1. 病死の場合

まず死因が病死の場合を見る。いずれも umřěti が使用されている。

- 65) 6523(1015)年 手紙あるいは使者を介した伝言・ヤロスラフ(13)に姉妹のベレドスラヴァが父ヴラヂミル(06)の死を知らせてくる

だといわれている」。これに対して、この動詞がルシの人々の死を表す場合には、個々の人々の死ではなく、集団的な死、民族的滅亡を表すときに使われるようである。例えば、次は6601(1093)年の記事でルシに攻めた来たポロフツィをスヴァトボルク(B3)が迎え撃った時のことである。iv) 6601(1093)[ポロフツィとの戦いで多くの戦死者がでる] S(vja)topolkъ že vyiide na Želanju. i poidoša protivu sobě oboi. i sŕstupišasę. i ukrěpisę branъ. [i] poběgoša naši pre(d) inoplemenъniky. [i] padachu jazveni predъ vragy naši. i mnozi pogyboša (aor.3pl. <pogybnuti) [i byša] mertvi pače neže u Trъpolę.(PVL: 221-23)「スヴァトボルク(B3)はジェラニに出撃し、両軍が向かいあって進んだ。そして相会し、激戦になった。味方は異民族を前にして逃げ出し、敵の前で傷つけられ、次々に倒れた。多くの者が倒れ、死者はトレポリの場合よりも多かった」。

- 67) ヴラヂミル・モノマフ(D1)はフセヴォロド(D)の息子、1113-1125年にキエフ大公を務める。リハチョフによれば彼の教訓(poučenie)は、将来大公位を継がせることを考えて1118年にノヴゴロドから呼び寄せた長子ムスチスラフ(D11)に宛てたものであり、ラブレन्チー年代記の6604(1096)年の通常の記事の後に挿入されているが、実際に書かれたのはそれより後のこととされる。cf. Lichačev(1996: 512).

v tu že noščъ pride jemu věstъ. is Kyjeva ot sestry jeho Peredъslavy si. “o(te)съ ti umerlъ (I-Prt.< umъrěti). a S(vja)topolkъ seditъ ti Kyjevě ubivъ (Past.Prt.Act.< ubiti) Borisa. a na Glěba posla. a bljudisę jeho poveliku.” (PVL: 140-26)

その夜キエフの彼の妹ペレドスラヴァから彼のもとに「あなたの父は死にました。そしてスヴァトポルク(07)があなたのキエフに座っています。彼はボリス(14)を殺し、グレブ(15)には(刺客を)送りました。彼を十分に警戒して下さい」という報告が来た。

- 66) 6523(1015)年 父ヴラヂミル(06)の死についてのヤロスラフ(13)が市民たちに語った言葉

i reč(e) imъ] na věci. “o(te)съ moi umerlъ (I-Prt.< umъrěti). a S(vja)topolkъ sedi[tъ] Kyjevě. izbivaja bratъju svoju.” (PVL: 141-6)

民会で、「私の父は死んだが、スヴァトポルク(07)は自分の兄弟を殺してキエフに座っている」と言った。

- 67) 6604(1096)年 「モノマフの教訓」の中で・妻⁶⁸⁾の死について

i potom po Bonęčě že gonichom za Rosъ. i ne postigochoj jeho i na zimu Smolinsku idochъ. i-Smolenska po Velicě dni vyidoch i Gjurgeva m(a)ti umre (aor.3sg.< umъrěti). (PVL: 250-4)

その後私たちはロシ(川)を越えてボニャクを追跡したが、彼を捕えることができなかった。冬に私はスモレンスクへ行き、復活祭の後にスモレンスクを後にした。そしてユリー(D17)の母が死んだ。

2.7.1.2. 殺害の場合

次の例のように、殺害された人についても自動詞的表現で表す場合には umъrěti を用

68) ヴラヂミル・モノマフの2度目の妻、息子ユリー(D17)の母。6615(1107)年の記事には V se že lēt(o). prestavisę Volodimereja. m(ě)s(ja)čę. maja. vъ 7 d(e)нъ. (PVL: 281:24) 「この年ヴラヂミルの妃が亡くなった。5月7日のことであった」という形で出てくる。

いる。

68) 6604(1096)年 「モノマフの教訓」の中で・ヤロ波尔ク(B2)の死⁶⁹⁾について

i paky na toi že storoně u Krasna Polovci pobědichom. i potomъ s Rostislavom že u Varina vežě vzechom. i potom chodivъ Volodimerju. paki Jaropolka posadich. i Jaropolkъ umre (aor.3sg.< umьrěti). (PVL: 249-5)

その後、クラスノの近くの同じ岸で私たちはボロフツィを打ち負かし、それからロスチスラフ(D2122)と共にヴァリンの近くで幕舎を奪い取った。その後ヴラヂミリに行き、再びヤロ波尔ク(B2)を据えたが、ヤロ波尔ク(B2)は死んだ。

これらの例から、直接話法中でも umьrěti が死因に依らず、病死、他者による殺害、いずれの場合も使用されることが分かる。一方で、他者に殺害された場合の使用は、実際にはそれほど多くないことも分かる。その場合には、次節で見るように、直接話法の場合も、地の文と同じように他動詞表現が使われる。

2.7.2. 直接引用のなかで使用される他動詞 ubiti

直接引用された登場人物の言葉の中でも、殺された人物については、その事実を明示するのが普通である。次の、父ヴラヂミル(06)と兄ボリス(14)の死についてヤロスラフ(13)がグレブ(15)に書き送った手紙の文言あるいは使者の言葉では、病死した父の死については umьrěti が、殺されたボリスの死については ubiti が使用されている。

69) 6523(1015)年 父ヴラヂミル(06)と兄ボリスの死をヤロスラフ(13)がグレブ(15)に知らせる

v se že vremę prišla bě věstъ kъ Jaroslavu ot Peredъslavy. o otni sm(e)rti. i posla Jaroslavъ k Glěbu gl(agol)ę “ne chodi o(te)съ ti umerlъ (1-Prt.< umьrěti). a bratъ ti ubьjenъ (Past.Prt.Pass.< ubiti) ot S(vja)topolka.” (PVL:135-27)

この時父の死についての報せがペレドスラヴァからヤロスラフ(13)のもとに来て

69) 上の例48) に引いた6594(1086)年の記事より彼の死は刺客による殺害であることが分かる。

いたので、ヤロスラフ(13)はグレブ(15)に使者を送って、「行かないで下さい。あなたの父(ヴラヂミル)は死んでしまい、あなたの兄(ボリス)はスヴァトポルク(07)に殺されました」と言った。

次の例も同様である。

- 70) 6604(1096)年 ムスチスラフ(D11)がオレグ(C4)にあてた手紙・オレグとの戦いでムスチスラフの弟イジャスラフ(D12)が戦死したことについて

i posla k nemu Mstislavъ solъ svoi iz Novagoroda gl(agol)ę. “idi is Suždalę Muromu a v čjuzei volosti ne sědi. i azъ pošlju molitę z družinoju svojeju kъ o(t)cju svojemu. i smirju tę so o(t)c(o)mъ moim. ašče i br(a)ta mojego ubilъ (l-Prt.< ubiti) [jesi (pres.2sg.< byti)] to jestъ nedivъno v ratech bo i c(ěsa)ri i mužī pogybajutъ. (PVL: 237-27)

ムスチスラフ(D11)は自分の使者をノヴゴロドから彼(オレグ(C4))のもとに送って、「スズダリを出てムロムに行きなさい。他人の領地に座すな。私(ムスチスラフ)は使者を送って自分の従士団と共に父に懇願し、あなた(オレグ)と私の父(ヴラヂミル(D1))とを和解させよう。あなたが私の弟(イジャスラフ(D12))を殺したとはいえ、それは不思議なことではない。戦争では皇帝も勇士も倒れる者だからだ」と言った。

- 71) 6604(1096)年 「モノマフの手紙」⁷⁰⁾・モノマフ(D1)の実子にしてオレグ(C4)の名付け子イジャスラフ(D12)がオレグとの戦いで戦死したことについて⁷¹⁾

Jegda že ubiša (aor.3pl.< ubiti) dětę moje. i tvoje pred toboju. i běše tebě uzrěvše krovъ jeho. i tělo uvenuvšju jako cvětu novu procvetšju. jakož(e) agnъcju zakolenu. i rešči běše stojašče nad nim. (PVL: 253-18)

- 70) この手紙はヴラヂミル・モノマフから従兄弟オレグ(C4)に宛てられた。「モノマフの教訓」の後に続けて現れる。

- 71) 1096年9月6日の出来事。彼の死は6604(1096)年の通常の記事、地の文の中でも ubiša を使用して述べられている。

私とあなたの息子（イジャスラフ(D12)）があなたの面前で殺されたとき、あなたは彼の血と、まるで新しい花が咲いたばかりなのに小羊が刺し殺されたようにしぼんだ彼の遺体を見て、あなたは彼のかたわらに立ち、…言うべきであった。

一般の人々が自分たちの公について語る場合も同じである。

72) 6605(1097)年 ムスチスラフ(B31)が戦死したことについての市民たちの言葉

I rěša ljudŭje “se knęzъ ubŭjenъ (Past.Prt.Pass.< ubiti). da ašče se vdamy S(vja)topolku. pogubit ny vse.” i poslaša k S(vja)topolku gl(agol)ę. (PVL: 272-6)

そこで人々は「公は死んだ。もし私たちが降伏すれば、スヴァトポルク(B3)は私たちすべてを殺すだろう」と言い、スヴァトポルク(B3)に使者を送って、…言った。

以上、戦闘で殺された場合には直接話法の場合も ubiti の使用が一般的であることが分かる。

2.7.3. 直接引用の中で使用される přestavitise

以上2.7.で見てきたように、直接引用された話し言葉あるいは書簡の中では基本的に自動詞なら umřeti が使用され、誰かに殺された場合、戦闘で死んだ場合には他動詞の ubiti が使用される。しかし、přestavitise の使用が皆無というわけではない。

次は、すでに上で挙げたが、1074年の記事中に見えるペチェルスキー修道院の僧たちの物語の一節で、修道僧イサーキーが死んでしまったと誤解した院長アントニーが口にした言葉である。『過ぎし年月の物語』中、唯一この箇所では přestavitise が登場人物の口から出た言葉として直接話法の中に現れる。

73) = 31) 6582(1074)年 ペチェルスキー修道院の事績・僧イサーキーが死んだと誤解したアントニーの言葉

i reč(e) Antonii “se uže prestavilse (l-Prt.< přestavitise) jestъ (aor.3sg.< byti).” i

posla v manastyrъ po Feodosija i po bratju. (PVL: 193-10)

アントニーは「これはすでに亡くなってしまったのだ」と言って、フェオドシーと兄弟僧たちを呼びに（使者を）修道院に送った。

以上2.7.で見た直接話法中での使用は、上の2.1., 2.2.の地の文での使用についての観察と適合し、umьrětiが死因に依らず一般的に使用される表現であること、同時にもし人が戦争などで殺された場合にはそのことが明示されることが多いことを示している。さらに、イサーキーの死についての例は、宗教的環境において、かつ発話者によっては⁷²⁾、話し言葉でもprěstavitisęが使われうることを示している。

2.8. これまでの議論のまとめ

本稿の議論の出発点となった2つの点については次のような観察がなされた。

74) umьrěti と prěstavitisę の用法

a. 死に方について

1. umьrěti は自然死、他者による殺害といった死因を問わず用いられる。
2. prěstavitisę は自然死の場合に使用される⁷³⁾。
3. 人が尋常でない死に方、すなわち戦闘や災害、水害によって死んだ時、あるいは誰か他の個人に殺された場合は、他動詞 ubiti 「殺す」を用いたり、あるいは更に具体的な行為を示す動詞を用いて、その死に方を具体的に述べることが多い。

b. 当該人物に対する敬意が示されているかどうか

1. umьrěti は人が死ぬことを意味する通常の表現であり、使用される対象について特別な制限はない。ルシの公たち、貴族たち、一般市民からルシと敵対す

72) ただし、発話者の聖職者としての位階がそのまま prěstavitisę の使用の有無につながるわけではないと思われる。

73) より厳密に言えば「prěstavitisę が使用されていて、その具体的な死に方が分かる時は、すべて病死に限られる」ということになる。

る異民族に至るまで誰に対しても使用される。

2. *prěstavitiŝe*の使用はルシの人々、すなわち正教徒に限られる。もしこの語が何らかの敬意を表すとすれば、それは高貴な出自の人物、すなわち公の一族や大主教(*archiepiskop*)といった高位の聖職者に対しての敬意ではなく、キリスト教徒(正教徒)として死んでいった人々に対する宗教的意味を伴った敬意であろう。

以上の観察は地の文の記述からも、直接話法で引用された会話や手紙文など話し言葉における使用からも確認できる。ただし、*prěstavitiŝe*という動詞は専ら地の文にのみ現れ、会話の中で使用されること、話し言葉で使用されることはきわめて稀である。

これらの観察の結果に立って、本稿の議論の出発点となった市長官ドブリニャの死に戻るとすれば、『ノヴゴロド第1年代記(古輯)』の6625(1127)年の記事に拠る限り、彼はヴォロコラムスキー修道院文書の記述とは異なり、ローマ教会を奉じる西欧商人からの誘惑に屈することなく、正教徒として尊敬すべき生き方をし、そして平穏な死を迎えた」と推定されることになる。

一方で、これらの議論の元となる資料を集めるためにテキストを読み進めた結果気づいたことがある。それは、2つの動詞に分布の違いがあるのではないかという疑問である。この点について次章以下で考察する**。

** 本誌次号に掲載予定の本稿の「下」を見られたい。この後第3章では、それぞれの動詞が1) どのような文脈に現れ、どのような要素と共起するか、2) 年代記テキストのどの年代部分に現れるか、という2つの形でこの分布の違いが現れることを示す。そして、『過ぎし年月の物語』についての議論を通して、*prěstavitiŝe*を用いた記事が当該人物の死を周知し公式の記録としてとどめるために用いられる、いわば定型化した「死亡報告」として使われていること、これに対して*umbrěti*の方は「事件の叙述」のための形式として、当該人物の死を時間軸に沿って語られる物語、事件の描写の中で、その登場人物の一人に起きた出来事として述べる時に用いられる形式であることを示す。さらに前者の使用が年代記の中で比較的遅く始まり、徐々に定型化した表現になっていく過程を観察する。このことは*prěstavitiŝe*という動詞が南スラブ系の語彙であることと一致している。さらに、第4章では『ノヴゴロド第1年代記』について、この*prěstavitiŝe*を用いた「死亡報告」の定型化の度合いがさらに進んでいることを示す。その結果この動詞の使用に際して、第2章で観察した「正教徒の平穏な死を表す」という含意が失われてしまったのではないか、本稿の議論の出発点となったドブリニャの死についても、*prěstavitiŝe*の使用は単に彼が死亡したことを示すのみであり、平穏な死という含意はもはや存

テキスト

- Codex Marianus: Jagić, V. 1960. *Quattuor evangeliorum versionis palaeoslovenicae codex Marianus glagoliticus*. Graz: Akademische Druck-u. Verlagsanstalt.
- PVL: *Lavrent'evskaja letopis'*, vyp.1: *Povest' vremennych let, Polnoe sobranie russkich letopisej*, t.1. izd.2. 1926. Leningrad. (引用は L. Müller, *Handbuch zur Nestorchronik*, B.1, Forum Slavicum, B.48, München 1977 による)
- NPL: *Novgorodskaja pervaja letopis' staršego i mladšego izvodov*. 1950. Moskva: Izd. Akademii Nauk SSSR. (引用は The Hague-Paris: Mouton 1969 年刊の *Slavistic Printings and Reprintings* 版による)

参考文献

- 青木正博他 1978. 「ノヴゴロド第一年代記古輯 (シノド本) 訳・注」『古代ロシア研究』12: 33-56.
日本古代ロシア研究会
- _____ 1980. 「ノヴゴロド第一年代記古輯 (シノド本) 訳」Ⅱ『古代ロシア研究』13: 25-37.
日本古代ロシア研究会
- _____ 1983. 「ノヴゴロド第一年代記古輯 (シノド本) 訳」Ⅲ『古代ロシア研究』15: 23-30.
日本古代ロシア研究会
- _____ 1986. 「ノヴゴロド第一年代記古輯 (シノド本) 訳」Ⅳ『古代ロシア研究』16: 75-83.
日本古代ロシア研究会
- _____ 1989. 「ノヴゴロド第一年代記古輯 (シノド本) 訳」Ⅴ『古代ロシア研究』17: 103-131.
日本古代ロシア研究会
- _____ 1991. 「ノヴゴロド第一年代記古輯 (シノド本) 訳」Ⅵ『古代ロシア研究』18: 26-53.
日本古代ロシア研究会
- 有宗昌子他 2000. 「スズダリ年代記訳注」『古代ロシア研究』vol.20: 11-52. 日本古代ロシア研究会
- Bobrov, Aleksandr. G. 2001. “《Povesti drevnich let》(Novgorodskij paterik)” (2001年3月17日に
京大会館で行われた講演会レジメ)
- Cross, Samuel, H. 1953. *The Russian Primary Chronicle: Laurentian Text*. Cambridge, Massachusetts: The Mediaeval Academy of America.

在しないのではないか、という疑問が出てくる。しかし一方で、『ノヴゴロド第1年代記』のそれぞれの記事を詳細に見ると、この年代記の集成に当たって「ノヴゴロドにとって必要な情報を記録する」という態度が一貫していることが明らかになる。そして、ノヴゴロドの市民の死についても、尋常でない死については、そのことがはっきりと分かる形で記録されていること、その場合 *prěstavitiŝe* は使用されないことが確認される。第5章は、全体のまとめに宛てられる。本稿 [上・下] での議論の範囲は一人ドブリニャの死を越え、『過ぎし年月の物語』と『ノヴゴロド第1年代記』に記録されているおよそあらゆる人物の死に通じるものである。とはいうものの、年代記の記録と集成の作業が人の手によるものである以上、資料の写し違い、伝聞の誤り、記憶の誤りと言った様々な偶然的な要素の混入による記録の誤りの問題が避けがたいことは当然である。

- Dal', Vladimir. 1880-1882. *Tolkovyj slovar' živago velikoruskago jazyka. (2-e izdanie, ispravlennoe i značitel'no umnožennoe po rukopis' avtora).* S.-Peterburg-Moskva: Izd. knigoprodavca-tipografa M.O.Vol'fa (引用は Gosudarstvennoe Izd. Inostrannyh i nacional'nyh slovarej によるリプリント版、Moskva. 1955による)
- Geschichte: Hellmann, M. (ed.) 1976-1989. *Handbuch der Geschichte Russlands. Bd. 1. Von der Kiever Reichsbildung bis zum Moskauer Zartum.* Stuttgart: Anton Hiersemann.
- Janin, V. L. 1988. *Nekropol' novgorodskogo sofijskogo sobora: Cerkovnaja tradicija i istoričeskaja kritika.* Moskva: Nauka.
- Karamzin, N. M. 1842. *Istorija gosudarstva rossijskago.* kn.1, t.1-4. S.-Peterburg: Tipografija Eđualda Praca. 1842 (引用は Moskva: Kniga. 1988 刊行のリプリント版による)。
- 國本哲男他 1987. 『ロシア原初年代記』 名古屋大学出版
- Lehr-Splawiński, Tadeusz. 1959. *Żywoty Konstantyna i Metodego (obszerne): Przekład polski ze wstępem i objaśnieniami oraz z dodatkiem zrekonstruowanych tekstów staro-cerkiewno-słowiańskich.* Poznań: Instytut Zachodni
- Lichačev, D. S. 1996: *Povest' vremennyh let* (Podgotovka teksta, perevod, stat'i i kommentarii D. S. Lichačeva, pod redakciej V. P. Adrianovoj-Peretc, izd. 2. ispravlennoe i dopolnennoe) S.-Peterburg: Nauka.
- L'vov, A. S. 1975. *Leksika "Povesti vremennyh let".* Moskva: Izd. Nauka.
- Maslov, Ju. S. 1984. "Tipologija slavjanskich vido-vremennyh sistem i funkcionirovanie form preterita v "epičeskom" povestvovanii." *Teorija grammatičeskogo značenijsa i aspektologičeskie issledovanija.* Leningrad: Nauka (Leningradskoe otdelenie).
- Müller, Ludorf. 1999. *Die Nestorchronik. (Handbuch zur Nestorchronik, Band 4.)* (Forum Slavicum Band 56.) München: Wilhelm Fink Verlag.
- PLDR 1982: *Pamjatniki literatury drevnej Rusi: Vtoraja polovina XV veka.* 1982. Moskva: Chudožestvennaja literatura. pp.188-191.
- 「リユーリック王朝系図: Rodoslovnaja rjurikovičej」 1981. 『古代ロシア研究』 vol.14. 33-57. 日本古代ロシア研究会
- 佐藤昭裕 1992. 「古ロシア年代記『過ぎし年月の物語』 研究—その言語とテキストの構造—」 『京都大学文学部研究紀要』 第31号. pp.231-312.
- Sato, Akihiro. 1993. "Struktura povestvovanija i tekstobrazujuščie sredstva v "Povesti vremennyh let" i "Novgorodskoj pervoj letopisi." *Comparative Studies in Slavic Languages and Literatures: Japanese Contributions to the 11th International Congress of Slavists.* pp.13-39.
- Sielicki, Franciszek. 1968. *Powieść minionych lat.* Wrocław-Warszawa-Kraków: Zakład Narodowy im. Ossolińskich.
- SJS: *Slovník jazyka staroslověnského: lexicon linguae palaeoslovenicae.* 1958–1997. Praha: Akademia Slovar' russkogo jazyka. 1983. Akademija nauk SSSR, Institut russkogo jazyka (Izdanie vtoroe, ispravlennoe i dopolnennoe). Moskva: Izd. Russkij jazyk.
- Sreznevskij: Sreznevskij, I. I. 1893-1906. *Materialy dlja slovarja drevne-russkago jazyka po pis'mennym pamjatnikam,* t.I - III. (引用は Graz: Akademische Druck- u. Verlagsanstalt. 1971 刊のリプリント版による)
- SRJ XI-XVII: *Slovar' russkogo jazyka XI-XVII vv..* 1975-. Akademija nauk SSSR, Institut russkogo

- jazyka. Moskva: Nauka.
- Šachmatov, Aleksej. 1908. *Razyskanija o drevnějšich russkich lětopisnych svodach*. S.-Peterburg: Tipografija M. A. Aleksandrova (引用はRussian Reprint Series LIX, The Hague: Europe Printing. 1968刊のリプリント版による)
- Tatiščev, V. N. 1995. *Istorija rossijskaja*, čast' 2, (2-ja redakcija) (Sobranie sočinenij Tom 2, 3) Moskva: Naučno-Izdatel'skij centr "Ladomir".
- Vaillant, André. 1968. *Textes vieux-slaves, 1. Textes et glossaire*. Paris: Institut d'études slaves.
- Vlasto, A. P. 1988. *A Linguistic History of Russia: To the End of the Eighteenth Century*. Oxford: Clarendon Press
- 除村吉太郎訳 1943. 『ロシア年代記』 東京：弘文社